

### 第3項 土坑

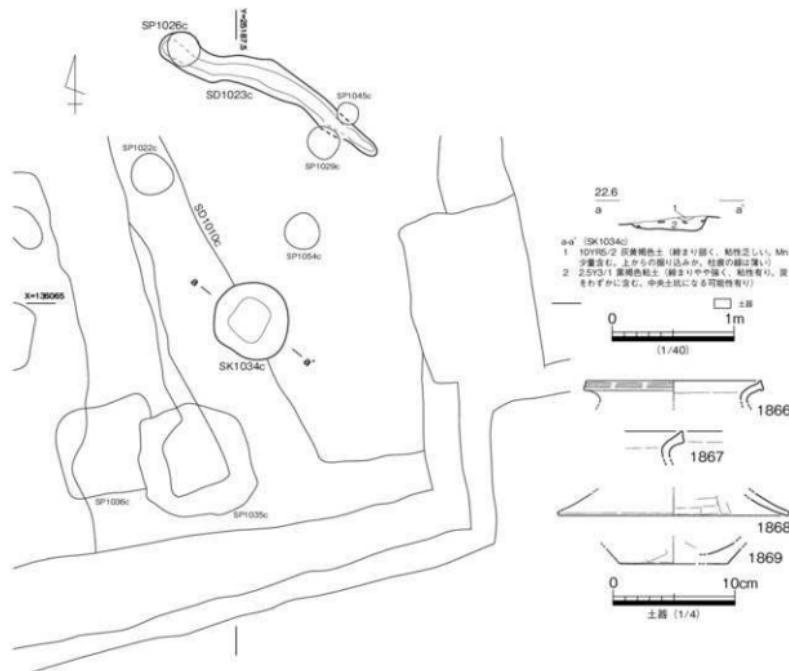
#### (1) SK1034c

1 区南東で検出した円形の土坑である。直径約 0.65 m、深さは検出面から 0.11 m を測る。断面は浅い逆台形で埋土中に炭を僅かに含むという記録がある。周辺柱穴と組みあって堅穴建物の構成遺構となる可能性があるが、周辺の柱穴配置が不規則であることから認定していない。

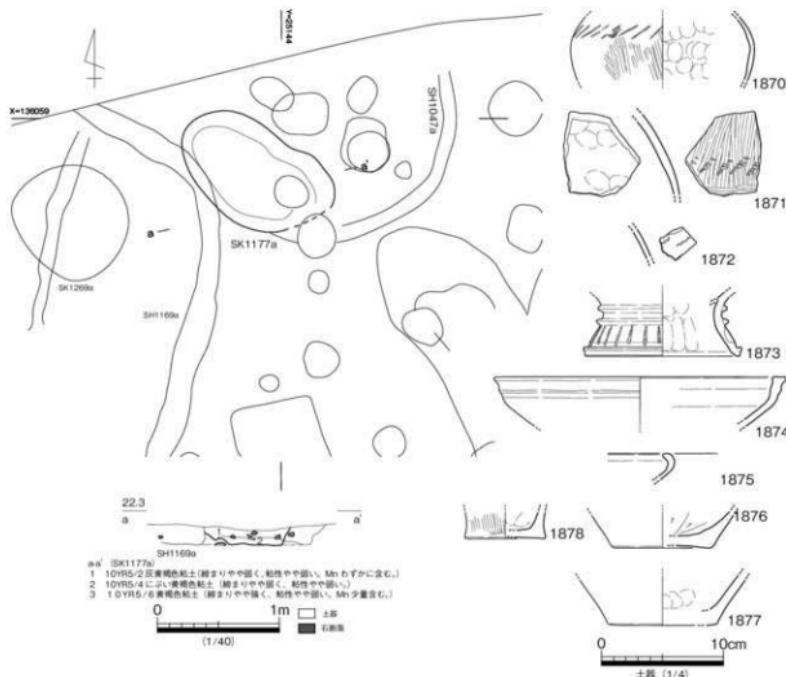
出土遺物は後期前半の甕や底部を含むが、1868 の高杯裾が後期後半に属すことから後期後半に廃絶した土坑と判断した。

#### (2) SK1177a

1 区中央や北寄りで検出した不整椭円形の土坑である。長軸 1.36 m、短軸 0.8 m で深さは 0.14 m と浅い。近接する SH1207a に付属する SD1038a と類似する堆積状況を示し、また同じ位置で重複する堅穴建物 SH1047a とも深さが大きく変化しないことから、本来は SH1047a の埋没途上の堆積単位の一つを詳細に精査したものかもしれない。炭化物を分析した結果、コナラ属アカガシ亜属の炭化材を確認した。また、モモ核 1 点が出土している（第4章第2節4）。



第247図 土坑 SK1034c 平・断面図 出土遺物実測図



第248図 土坑SK1177a 平・断面図 出土遺物実測図

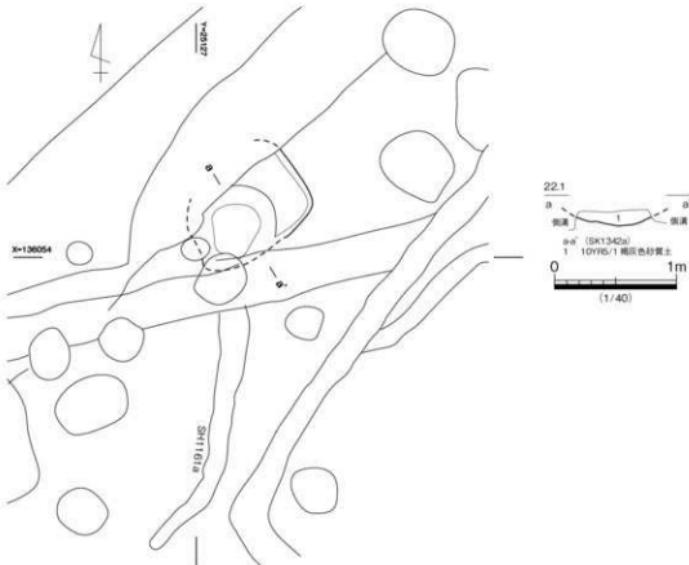
出土遺物は中期後半の土器で占められ、後期に下るものはない。高杯口縁部の1875の形状は中期後半新段階に属すことから、SH1047aと同じく中期後半新段階に埋没した土坑と判断した。

#### (3) SK1342a

1区西端で検出した不整方形の土坑である。長辺約1m、短辺0.6m以上、深さは0.11m以上で断面は逆蒲鉾形を呈す。堅穴建物の中央土坑の可能性もあるが、埋土中に炭化物は目立たない。後期後半から終末期の堅穴建物SH1161aに切られており、それより古い。出土遺物は僅かで固化していない。

#### (4) SK2074b

2区北側で検出した隅丸長方形の土坑である。長辺2.4m、短辺1.55m、深さ0.28mで断面は逆台形を呈す。主軸は北から43度東に偏る。掘方下位に完形に復元可能なも含め遺存状態が良好な土器が大量に投棄されていた。これらは基盤土ブロックを含む無遺物層(断面1層)に覆われた良好な一括資料である。なお、掘方東側壁の平面形は東側を中心とした弧を描き、西側壁もそれに平行するように弧を描く。さらに投棄された土器群も同様の弧を描くように分布する。弧の中心は東に1.8m離れて存在



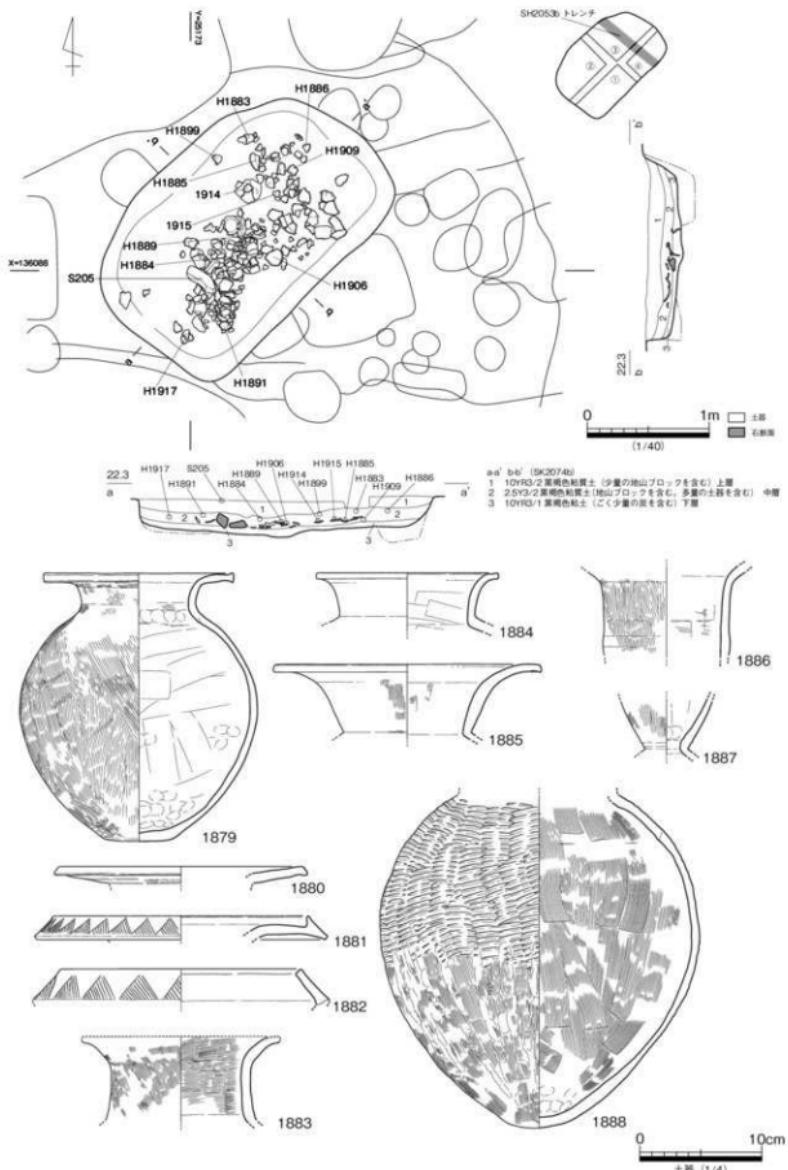
第249図 土坑 SK1342a 平・断面図

する終末期の堅穴建物 SH2303a 付近にある。両遺構間で土器が接合する関係はなかったが、当土坑は SH2303a の周堤に隣接して同時に存在した遺構と推察する。

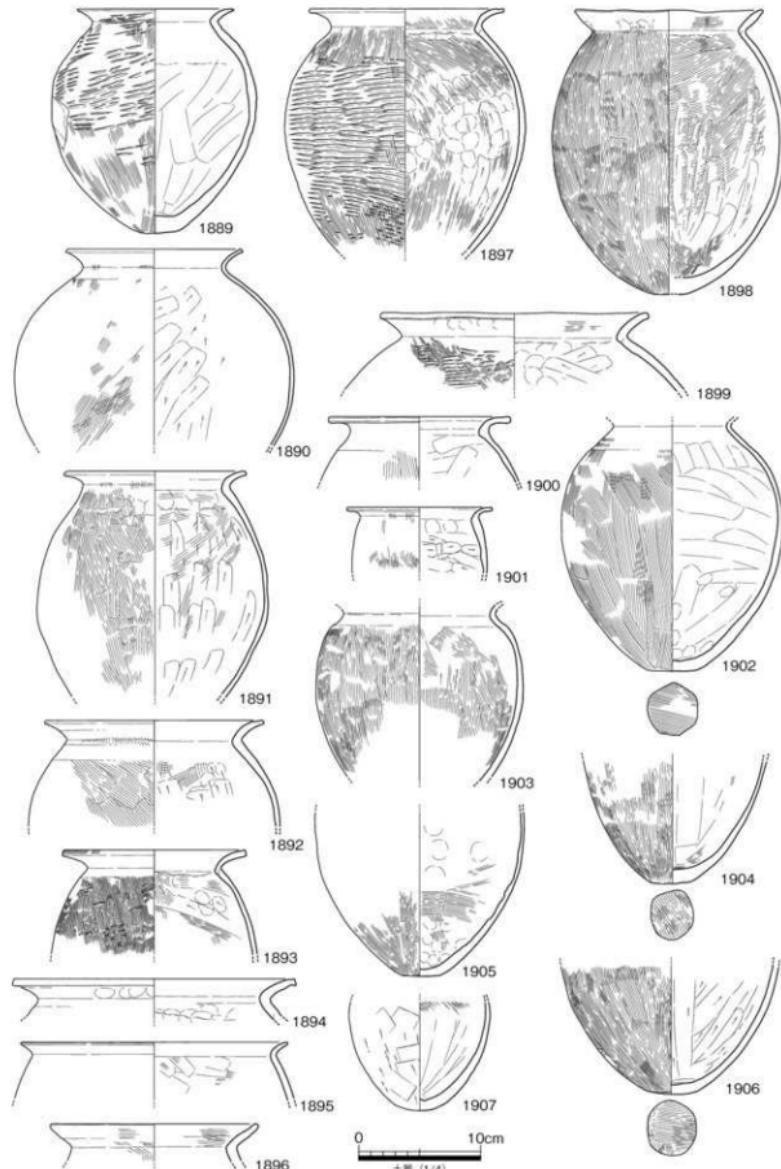
出土遺物は壺、甕、外反口縁鉢、直口縁鉢が揃い高杯は組成しない。1879・1880・1883～1886は口縁拡張のない広口壺である。頸部が直立するもの（1883・1884・1886）と逆「ハ」の字に開くものがある。1881・1882は複合口縁壺である。口縁部に A1 類の鋸歯文を施す。壺胴部の 1888 は上半をやや粗いタタキで調整し、底部は丸みを帯びる。1887 は口縁部が内唇気味に立ちあがる細頸壺である。なお 1882・1883・1885・1887・1888は黒雲母を多量に含む胎土 H を含む。

1889～1906 の甕は法量の多様性があるが胴部は下半部の膨らみが強くなり、底部が丸いという共通性がある。口縁胴部境の内面稜線は比較的鋭いが、丸く収めるタイプもあり、多様である。外面調整はタタキ調整、ハケ、ケズリ調整があり、内面は板ナデ、ハケ調整が主体である。口縁部外反する中形・大形鉢は口縁部が「S」字状に短く外反するもの（1908・1909）、内面に明瞭な稜線を有するもの（1910）、口縁の括れと外反が弱いもの（1911）がある。直口鉢は手づくねで製作されるが器壁が厚い（1912）ものと、皿状で口縁端部を面取りするもの（1913・1914）がある。これらの土器は終末期に属すが、壺では口縁部が頸部上端から緩やかに屈曲して外反する形態や、皿状鉢の口縁端部を面取りすること等から終末期中段階の土器を下限とする。S205 は安山岩製の砥石である。板状に破断した自然石を敲打で成形して方柱状にし、3 面を砥面とする。砥面は a・c 面が# 2000、b 面が# 8000 の平滑度を有す。

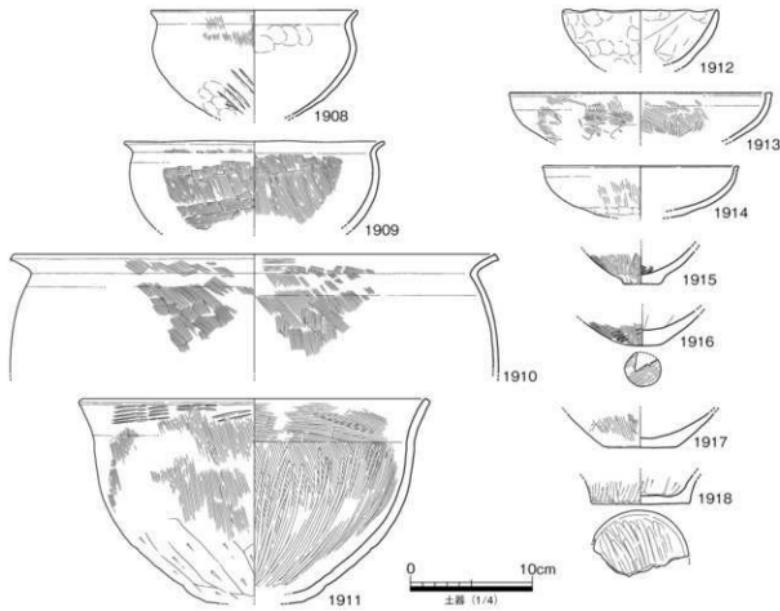
以上の出土遺物から終末期中段階に廃絶した土坑である。



第250図 土坑 SK2074b 平・断面図 出土遺物実測図 1



第 251 図 土坑 SK2074b 出土遺物図実測図 2



第252図 土坑SK2074b出土遺物実測図3

## (5) SK2089b

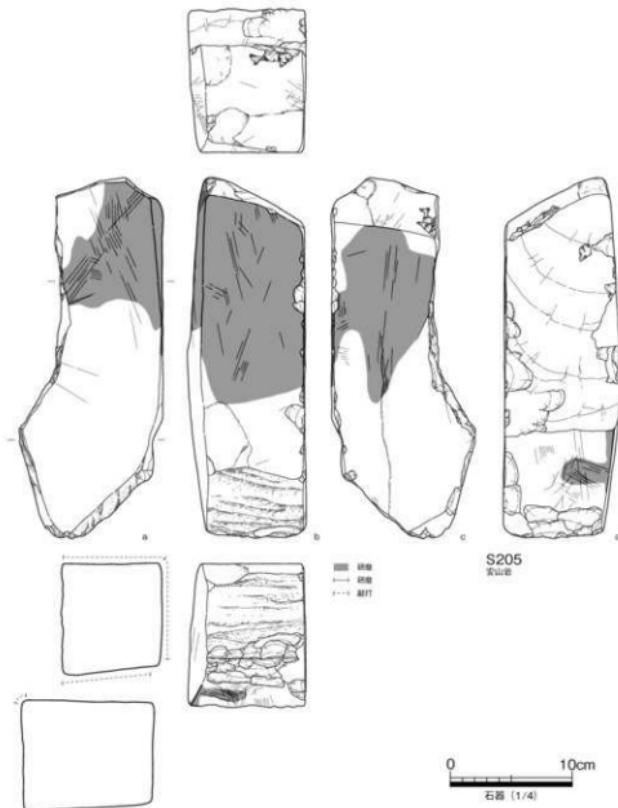
2区中央付近で検出した長楕円形の掘方をもつ土坑である。調査時は断面図に示したように切り合いのある2基の遺構（SH2097bとそれを切るSK2089b）として位置付けたが、整理時に調査写真等から同一の遺構における堆積層の違いと判断し、合わせて報告することとした。長軸3.5m、短軸1.6mを測る。いずれもSH2078bの埋土を切る。

配置は上述のSK2074bがSH2303aの周堤外縁に接する同時併存の遺構としたが、当遺構もまたSH2303aとはほぼ同一距離を有し、また主軸が合致することから、同様に位置づける必要がある。

出土遺物は後期後半から終末期の土器が多い。そのうち1922の小形壺は内外面丹塗りで、胎土の特徴から備中からの搬入土器である。また、1929は口縁部に段をもつ後期前半の大形鉢で、その内面に朱が遺存する。終末期中段階に廃絶した遺構である。

## (6) SK2099a

2区東南側で検出した不整楕円形の浅い土坑である。長軸1.7m、短軸1.1mを測る。隣接柱穴と組合い、堅穴建物の中央土坑と解するにはやや浅い。埋土中より中期後半新段階の甕体部・底部が出土したが、遺構の機能は不明である。



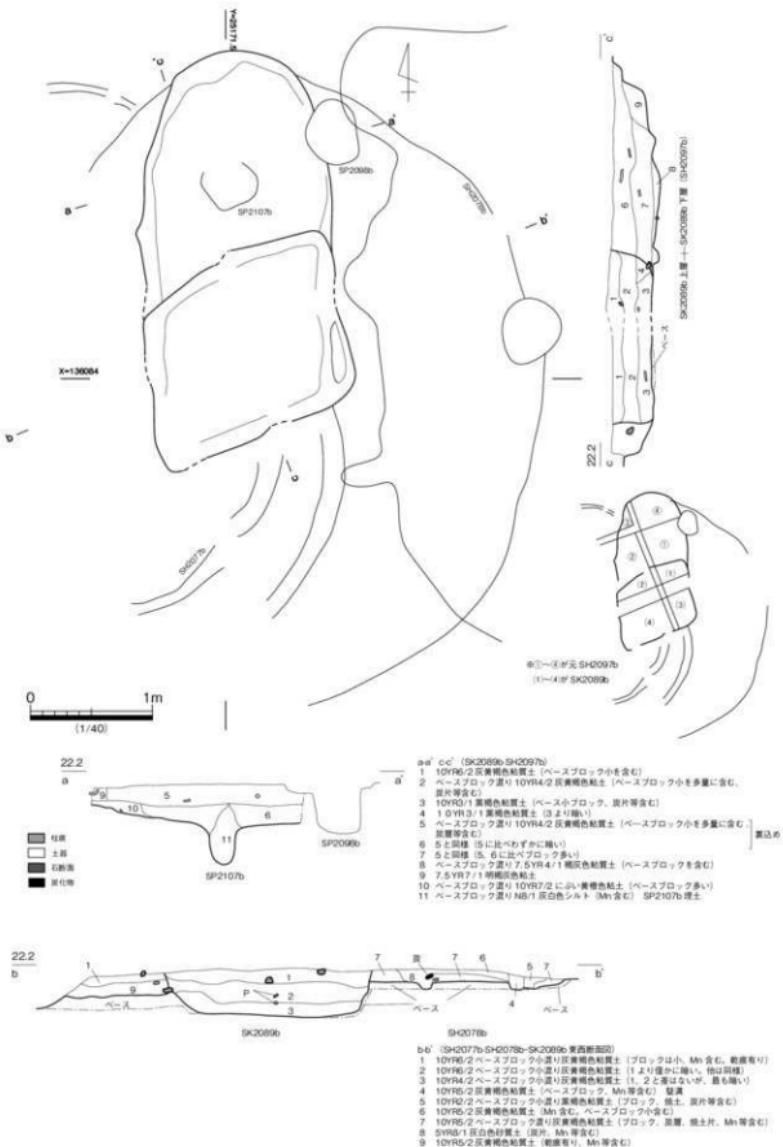
第 253 図 土坑 SK2074b 出土遺物実測図 4

## (7) SK2175b

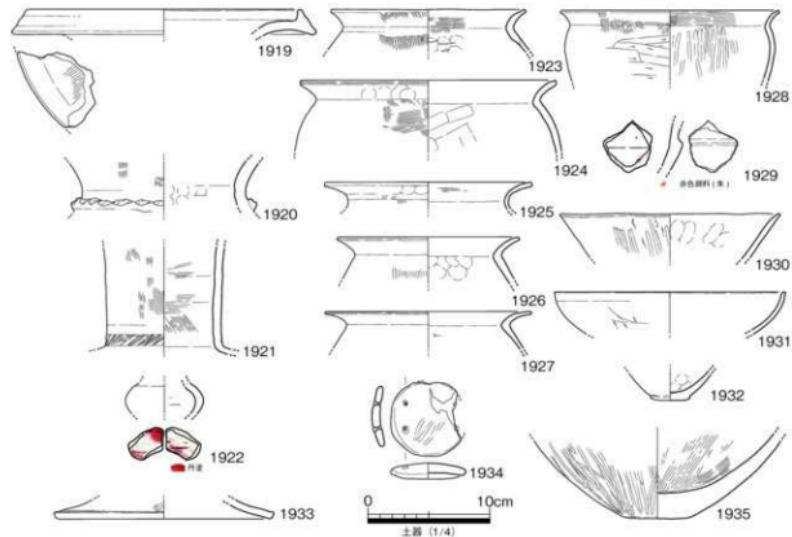
2 区北西で検出した不整楕円形で深い遺構である。長軸 0.98m、短軸 0.58m を測る。断面記録は検出面から約半分までしかなく、深部の埋土状況は不明である。掘方の東側に厚さ 8cm の堆積土層があり、調査時は竪穴建物として認識していた。ただ床面形状が明確ではなく、ここでは本遺構を単独の土坑として報告したが、SH2076b や SH2078b に切られる竪穴建物を想定することも可能である。

本土坑の内部には 30cm 大の砂岩礫が投棄され、その上部の堆積層には炭化物が含まれる。礫より上位の炭化物を水洗した結果、クスノキ科とサカキの炭化材を検出した。また炭化したモモ核 4 点も出土している（第 4 章第 2 節 4）。

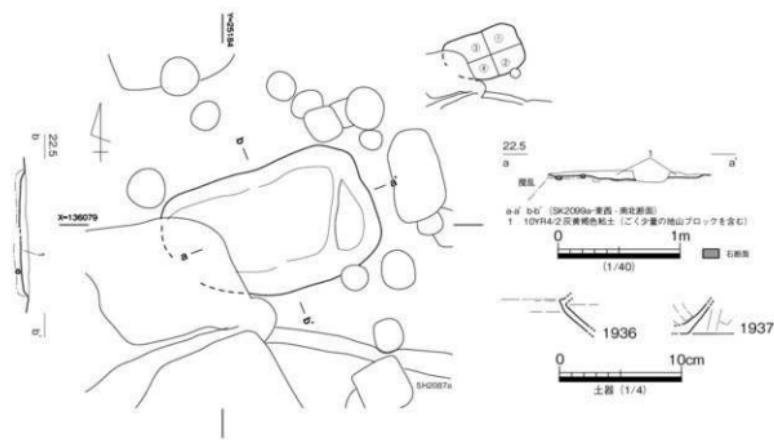
出土遺物は 1940 等の後期前半の土器が含まれ、その時期に廃絶したと考えられる。



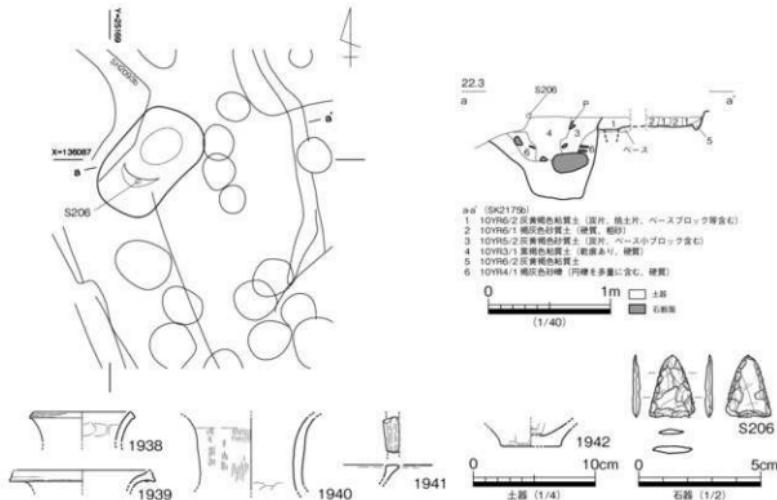
第254図 土坑 SK2089b 平・断面図



第 255 図 土坑 SK2089b 出土遺物実測図



第 256 図 土坑 SK2099a 平・断面図 出土遺物実測図



第257図 土坑SK2175b 平・断面図 出土遺物実測図

#### (8) SK2230a

2区中央やや東側で出土した梢円形の土坑である。長軸1.5m、短軸1.13m、深さ0.15mの規模を測る。埋土の上層は基盤土ブロックを含む埋め戻し土である。出土遺物は上層で後期後半の遺物が出土した。1945は口縁部が短く外反し体部下半が直線的に底部に向かって窄まり、底面は尖り気味で、下端に焼成前の穿孔を施す形態である。後期後半に属す。

後期後半古段階に廃絶したSH2224aの埋土を切り込んでおり、それ以後の土坑である。

#### (9) SK3014b

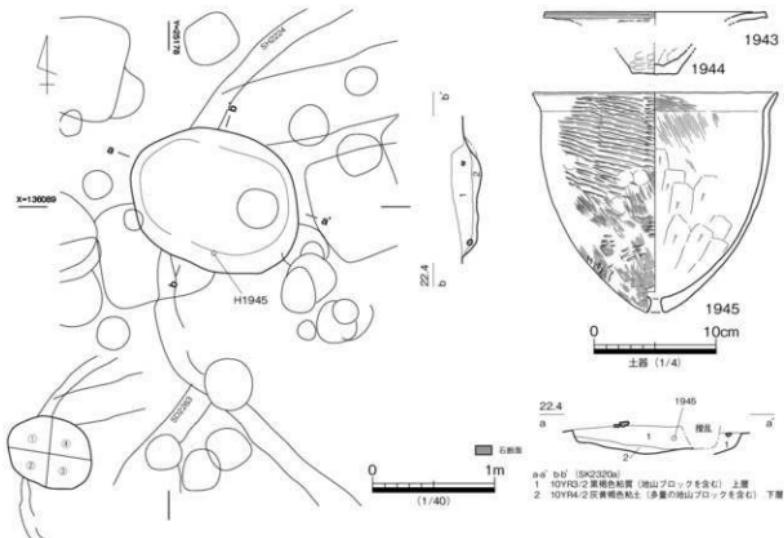
3区南東隅で検出した不定形の土坑である。調査対象地が狭小なため全体の形状が不明である。後期前半の土器が出土した。

#### (10) SK3064b

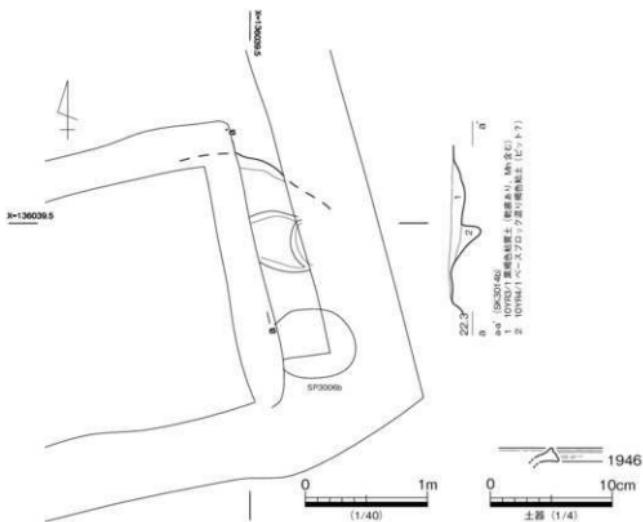
3区中央やや西側で検出した隅丸長方形の土坑である。長辺1.2m、短辺0.74m、深さ0.15mを測り埋土の上層より土器が出土した。後期前半の掘立柱建物SB3375bに切られる。

1947は中期後半古段階の壺である。頸部に押捺突帯を貼付し口縁端部は主に上方にのみ拡張し細い出現期の四線文を施す。1948は口縁部が「く」の字に屈曲して外反する中期後半古段階の壺。底部は全体的に器壁が薄く、体部下半が直線的に開く形態である。

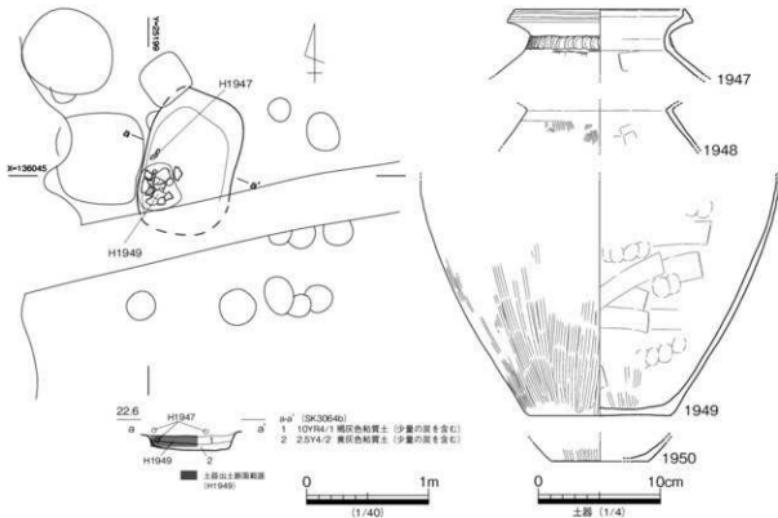
以上の出土遺物から当土坑は中期後半古段階に埋没した土坑と考えられる。周辺の柱穴組合せ建物遺構に組み込まれる可能性も高い。



第 258 図 土坑 SK2230a 平・断面図 出土遺物実測図



第 259 図 土坑 SK3014b 平・断面図 出土遺物実測図



第260図 土坑SK3064b平・断面図 出土遺物実測図

## (11) SK3077b

3区南東付近で検出した楕円形の土坑である。長軸約1.25m、短軸は0.7m以上、深さ0.38mである。埋土中には炭片が含まれており、堅穴建物の中央土坑となる可能性も高いが、周辺柱穴との組み合わせが不明瞭のため、単独で報告する。

埋土は2段階で堆積する。開削後まもなく断面4・5層で土坑の大半は埋められる。その後再掘削し2・3層による炉のような使用が始まる。上部の1層は中世包含層の流入である。

埋土状況から周辺の柱穴と組合い堅穴建物となる可能性が高い。炭化物を分析した結果、コナラ属クヌギ節、コナラ属コナラ節の炭化材を検出した（第4章第2節）。

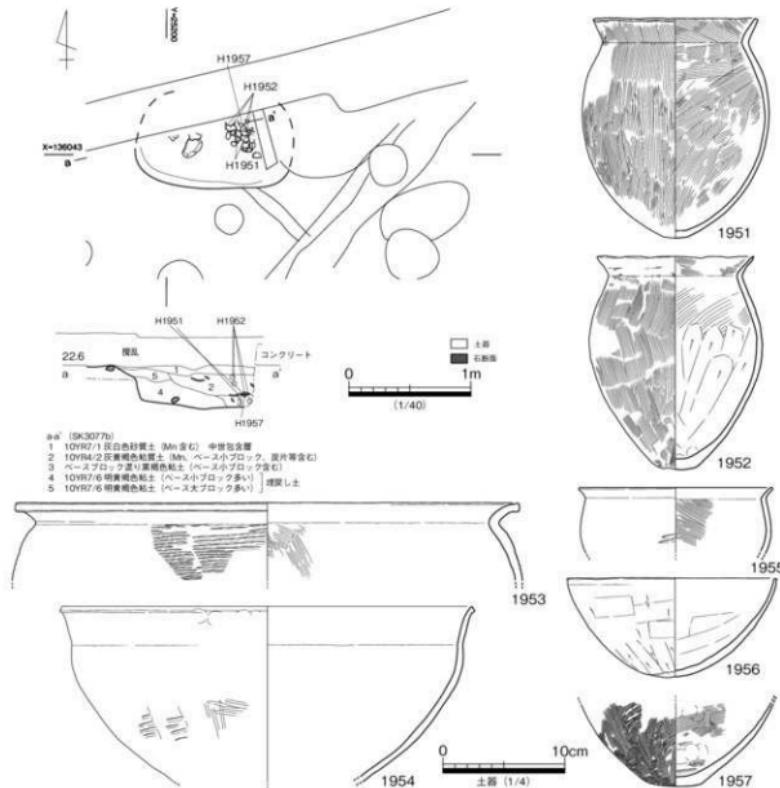
出土遺物は甕と鉢である。甕は体部中ほどに最大径があるラグビーボール形で、終末期に相当する口縁部内面に強い棱線がある。大形鉢と直口鉢が組成し、直口鉢の口縁部は明確に面取りがある。

これらの土器は後期後半新段階に属し、その時期に埋没した土坑と判断した。

## (12) SK3116b

3区東端で検出した長楕円形の土坑である。長さ1.3m、幅0.75m、深さ0.06mと浅い土坑で、埋土中に少量ながら炭を含んでおり、堅穴建物の中央土坑の可能性が高い。周辺は擾乱が多く、組み合う柱穴の抽出は困難である。

1958は後期後半新段階の広口壺である。内傾する頸部から口縁部が斜め上方に向くい形態で口縁端部は拡張しない。1959の底部は底面がやや下方に膨らんだ平底で、底面にタタキ痕跡がある。M81はガラス化した粘土溶解片で一見鉄滓に見えるが鉄成分が見られず、発泡組織のみである。鍛冶作業に伴



第 261 図 土坑 SK3077b 平・断面図 出土遺物実測図

うものではないと考える。近現代の混在品の可能性が高い。

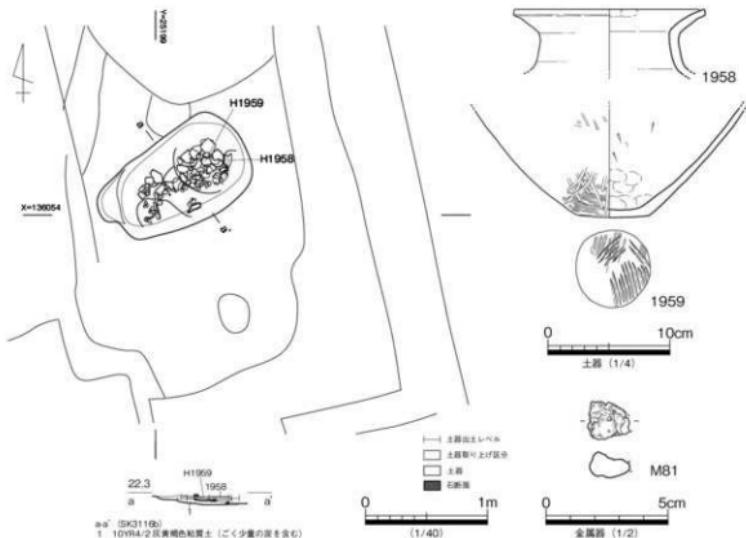
以上の出土遺物から本土坑は後期後半新段階に廃絶した遺構である。

### (13) SK3155b

3 区北西付近で検出した南北方向の橢円形の土坑である。現状で長軸 1.3 m、短軸 0.7 m、深さ 0.25 m を測る。出土遺物はなく、遺構の時期や性格等について判断する材料は乏しいが、以下、周辺遺構との位置関係から当遺構の評価を試みる。

当遺構の東側 0.45 m 隅てに土器棺墓 ST3199b がある。また西側 1.9 m には長軸方向を同じくする溝 SD3331b がある。これらは関連する一つの遺構である可能性があり、詳細は ST3199b で報告するが、当土坑を墓坑と見立て、低墳丘をもつ周溝墓の可能性を考える。以下、その根拠を説明する。

土坑 SK3155b の断面写真を精査すると、側壁下半に褐色土が斑に混在する掘り残し部分が認められ



第262図 土坑 SK3116b 平・断面図 出土遺物実測図

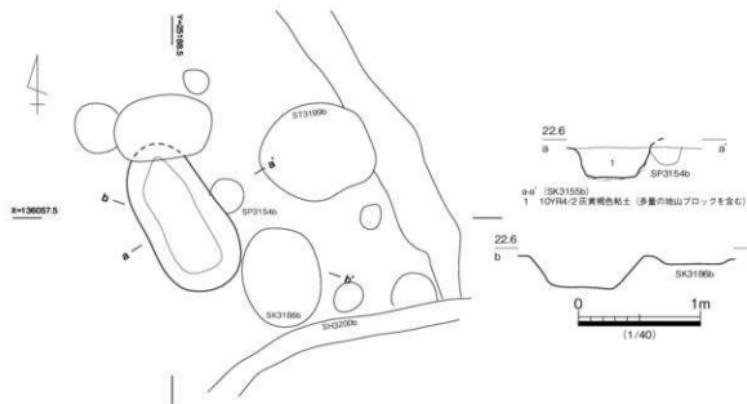
る。これは本土坑の断面形状が、a ライン記録より側壁の角度がもっと急であったことを示すものである。また断面土層を記録では細分されていないが、丁寧に撮影された解像度の高い写真を細かく見ると、断面中央の幅 0.35m の範囲に側壁側の基盤土ブロック層とは異なる基盤層ブロックをほとんど含まない暗褐色粘質土が薄くレンズ状の灰白色砂質シルトを間に挟みながら穏やかに堆積する状況が認められる。つまり側壁側の基盤土ブロックは意図的に置かれた裏込土で、中央の幅 0.35m の範囲が当初は空間を維持しながら、さほどの時間が経過しない間にその空間が埋没するプロセスが想定できるであろう。このことから、中央の幅 0.35m の範囲に有機物で構築された空間が想定でき、最も可能性が高いのが木棺の存在といえる。

この推察が正しければ、本土坑は土器棺墓と同時期の後期後半に属し、隣接する SH3200a に一部が切られた墓坑といえる。

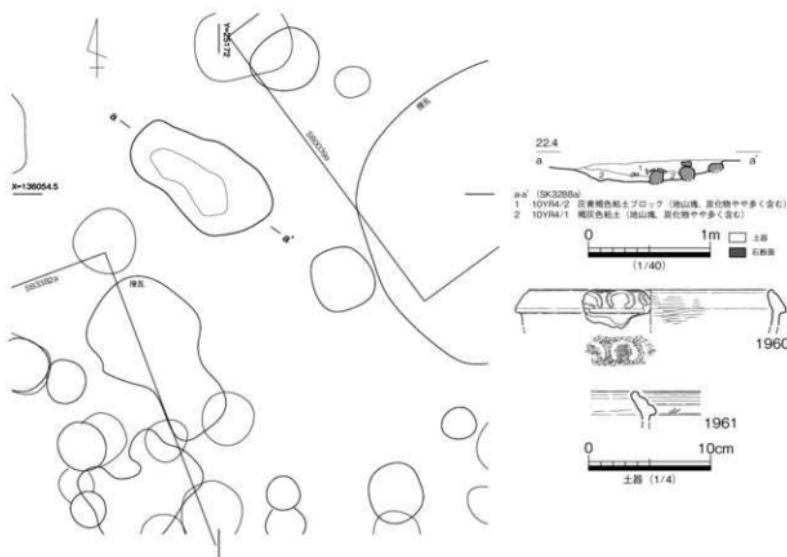
#### (14) SK3288a

3 区北側中央付近で検出した不整梢円形の土坑である。長軸 1.28 m、短軸 0.69 m、深さ 0.13 m で断面皿形を呈す。埋土は 4 ~ 10cm 大の礫や炭化物を多く含む灰褐色粘土層で、色調は基盤層に近い。

埋土中出土の土器は縄文時代後期の縁帶文系土器の深鉢である。1960 は肥厚し RL の縄文を施した口縁部に下向きの「C」字紋を陰刻し、左右に太い沈線を有す文様構成である。1961 の口縁部は沈線が施される部分の同一個体片の可能性が高い。縄文時代後期の岡山県笠岡市津雲貝塚（京大津雲 1920.）出土深鉢の器形に近似し、下向きの「C」字紋を渦巻文が退化・変容した文様構成と理解すると、いわ



第 263 図 土坑 SK3155b 平・断面図



第 264 図 土坑 SK3288a 平・断面図 出土遺物実測図

ゆる縄文時代後期中葉の津雲A式の新相に位置づけられ、本遺跡内（弘田川改修に伴う弘田川西岸遺跡を含む）で出土した縄文土器の時間幅内に収まる。土器全形が解る資料としては高松市本郷遺跡南地区に例（県教委2008の184）がある。

#### (15) SK3355b

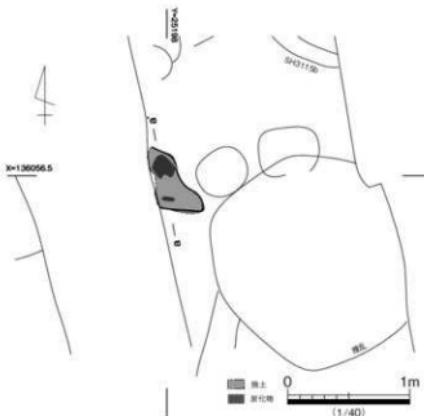
3区東端で検出した土坑である。搅乱等により部分的な検出にとどまり全体形状は不明である。幅0.5m、深さ0.17mで断面長方形の側面及び底面のはば全面が被熱により赤色化する。一部に黒色の炭化物が残る。本遺跡の弥生時代堅穴建物の中央土坑で壁面全面が被熱変色する例はほかなく、通常は被熱して赤化するのは部分的で、埋没土中に炭化物や焼土塊が混じるのが普通である。当遺構の状態は古墳時代の堅穴建物のカマドの状態に近い。出土遺物は弥生時代後期前半の土器底部が出土したが、遺構の時期を示すか否か明らかでない。

#### (16) SK3837a

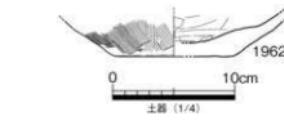
3区中央南端で検出した細長の長方形土坑である。長辺1.9m、幅0.6m、深さ0.31mの規模で、側壁の角度が急で箱型の断面を呈す。埋土は上下2層に分かれ、上層は暗褐色粘土と基盤土の粗いブロック混在層で下層は細かな単位のブロック混在層である。断面写真には柱痕らしき痕跡もあり、布掘建物の可能性もあるが、先のSK3155bのように墓坑の可能性もある。詳細は不明である。

#### (17) SK3885a

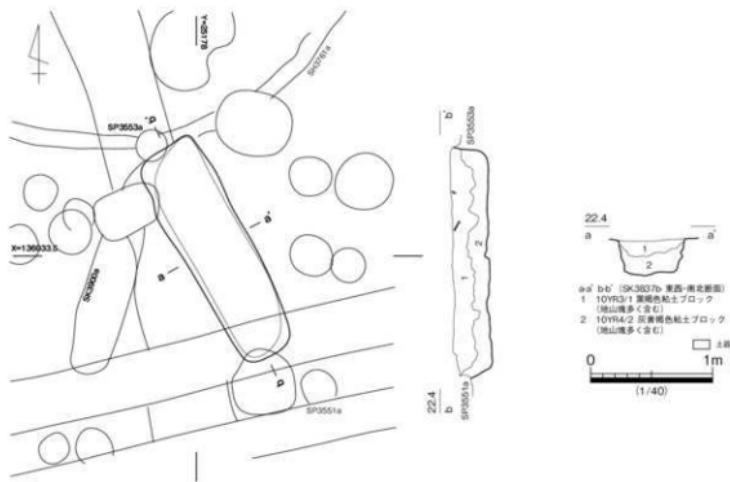
3区中央南側で検出した楕円形の土坑である。長径0.58m、短径0.45mを測る。焼土面を検出し、埋土中で後期後半古段階の瓶片が出土した。周辺柱穴と組合、堅穴建物となる可能性もあるが、適切な柱穴を見い出すことができなかった。



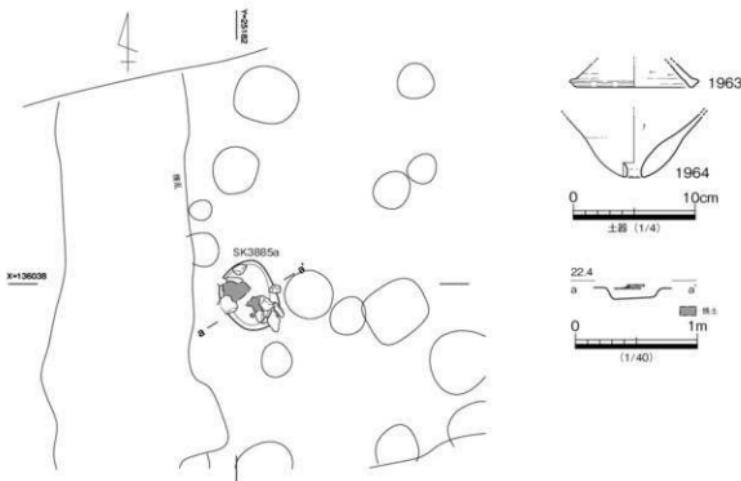
第265図 土坑SK3355b 平・断面図



第266図 土坑SK3355b 出土遺物  
実測図



第 267 図 土坑 SK3837a 平・断面図



第 268 図 土坑 SK3885a 平・断面図 出土遺物実測図

**(18) SK3900a**

3区南端でSK3837aに切られてやや方向を違えて検出した細長の長方形土坑である。長さ1.82m、幅0.4m、深さ0.1mの規模で断面は浅い皿形である。箱形の断面を呈すSK3837aとは対照的で、むしろその1層目だけで構成されるような断面形状である。

後期後半古段階の高杯片が1点出土した。1965は口縁のわりに口縁部の立ち上がりが大きく、口縁部下端に2条の凹線文風の強いナデを施し後期後半古段階に属す。布掘建物基礎または墓坑の可能性がある。

**(19) SK4007b**

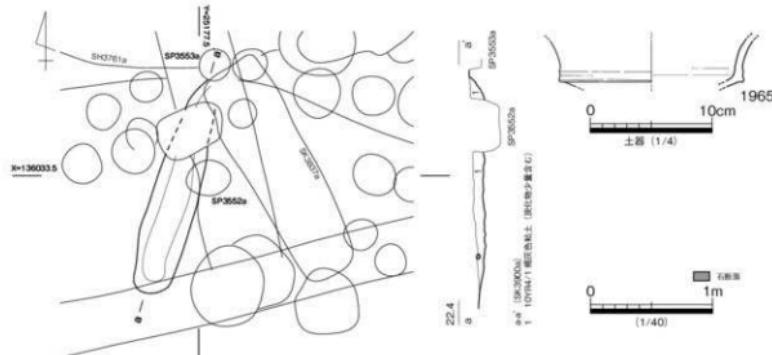
4区北西のSD4002a東側で検出した土坑である。堅穴建物の中央土坑と推察するが、組み合う柱穴が明らかでない。長辺1m、短辺0.8m、深さ0.12mの規模で断面は浅い皿形である。終末期の甕1点、小形鉢1点が出土した。

**(20) SK4023b**

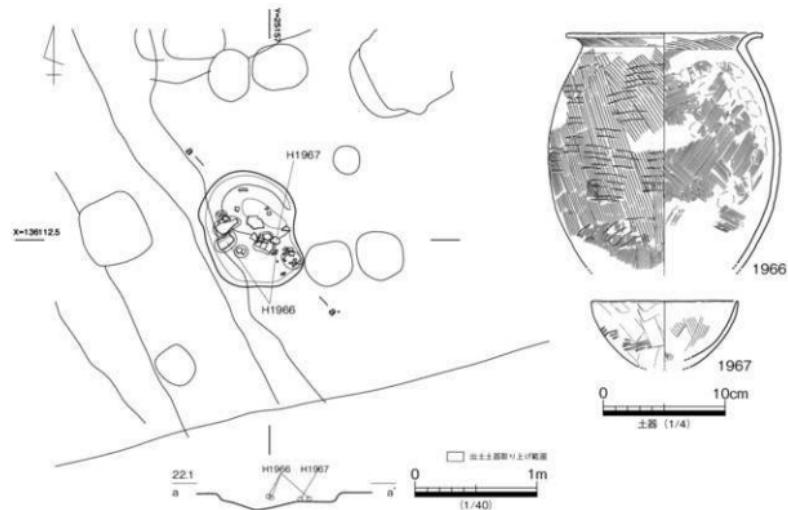
4区中央北端で検出した円形の土坑である。直径0.7m、深さ0.3mの規模である。断面は図面記録が十分でないが、写真記録によれば埋土の上部から下部まで連続して土器片多数が埋積していた。堆積土は暗褐色粘土で黄色系の基盤土ブロックの混在は少ない。しかし土器の含まれ方からみて、一度に一括して埋め戻したものと考えて支障ない。

出土遺物は後期後半新段階から終末期古段階に継続する土器がまとまる。1970は口縁胴部境の内面が緩やかに接続する後期後半古段階の古い形態を残す。1971・1975の直口小形鉢は体部下半が直線的に窄まる形状で、終末期古段階を下限とする。1972・1976の皿状鉢は口縁端部を面取りする終末期古段階を下限とする土器である。1978は瓶上端に付く把手であろう。後期後半古段階から出現する把手付瓶は当初円環状の把手だが、次第に多様な形態に転化する。矩形の把手は希少である。

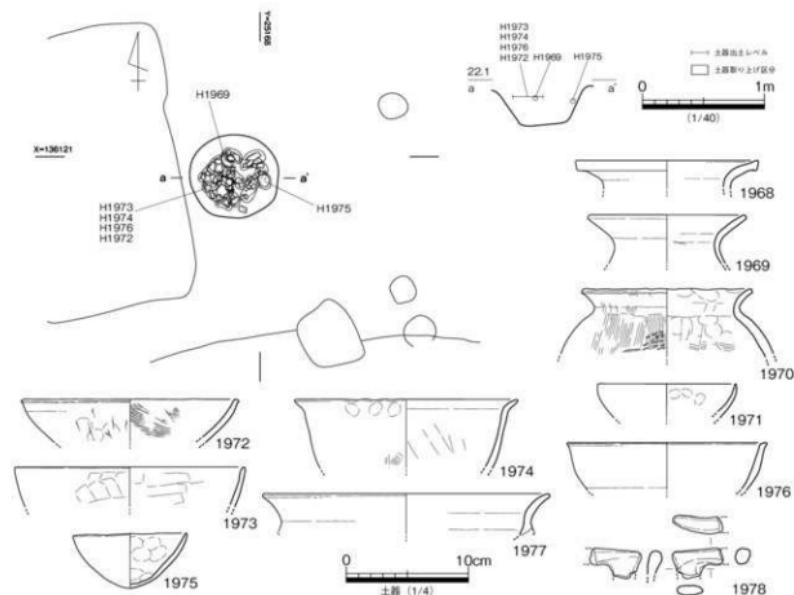
以上の出土遺物より、当土坑は終末期古段階に廃絶して埋め戻されたと判断した。堅穴建物と組み合って中央土坑となる可能性もあるが、搅乱等により現時点では明らかにならない。



第269図 土坑SK3900a 平・断面図 出土遺物実測図



第 270 図 土坑 SK4007b 平・断面図 出土遺物実測図



第 271 図 土坑 SK4023b 平・断面図 出土遺物実測図

## (21) SK4077b

4区北西端で検出した不定形の土坑である。東西方向にやや長く、1.2m以上の規模がある。深さは0.23mで一部炭を含みながら基盤土ブロックが混在する土で埋められる。底面から5cmほど浮いた状態で土器片がまとまって出土した。

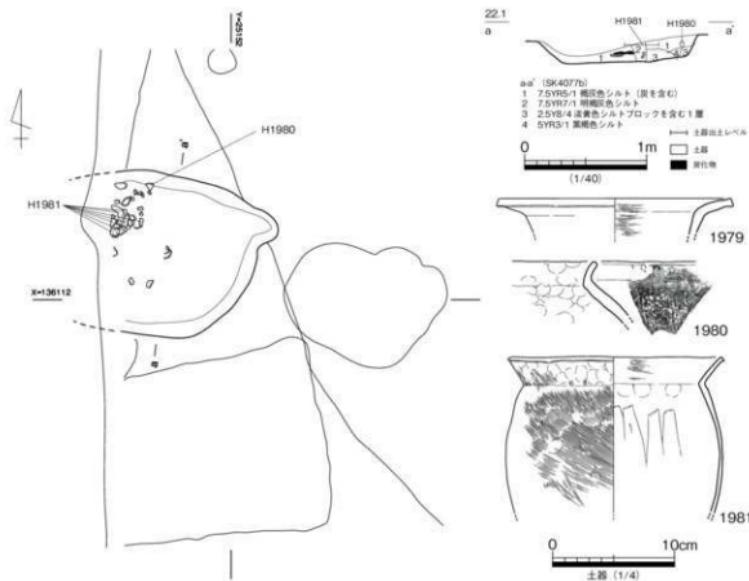
1979は終末期新段階の壺口縁部片である。斜め上方に直線的に開く頸部から口縁部が屈曲してさらに大きく開く形態で終末期新段階に属す。1980は大口径の短頸壺である。残存範囲から口径を推定すると30~35cmとなる。器面の磨滅が顕著だが、胴部外面には縦位の繩文叩きが観察できる。内面は細かいピッチの指押痕が残る。やや硬めの軟質焼成で淡茶褐色を呈し、厚みのある器壁の割れ面には胎土の芯の灰黒色層が観察できる。胎土中には細かな黒雲母・角閃石等の有色鉱物と赤色粒子を含み、備中系土器の胎土に近い。1981は終末期新段階の壺である。1980は当地域の土器形式に該当するものではなく、半島系無文土器の系譜をもつ個体と判断した。

以上の出土遺物により本土坑は終末期新段階に廃絶したものと判断した。

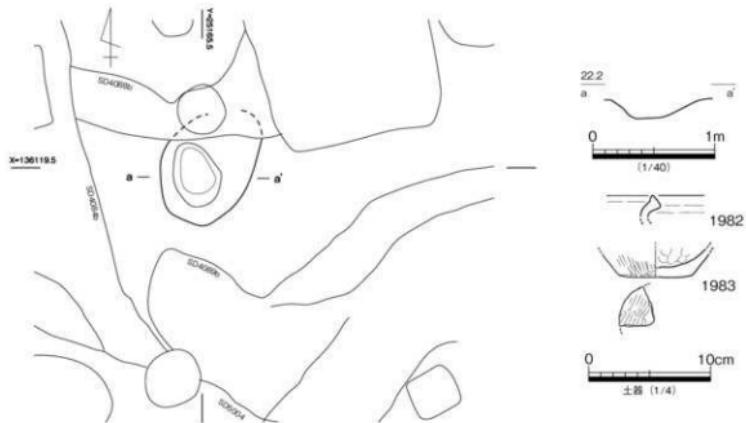
## (22) SK4087b

4区中央北端で検出した不整円形の土坑である。長径0.8m、短径0.72mで深さは0.18mの規模で断面形は逆台形を呈す。埋土は基盤土ブロックを堆積層の下位に多く含み、上部は暗褐色粘土で埋積する。

後期前半に属す壺・底部片が出土しており、その時期の廃絶が考えられる。



第272図 土坑SK4077b 平・断面図 出土遺物実測図



第 273 図 土坑 SK4087b 平・断面図 出土遺物実測図

## (23) SK4140b

4 区中央付近で検出した円形の土坑である。直径 0.85 m のほぼ正円形で深さは 0.55 m の規模である。埋土は暗褐色土單層で土器片や 10 ~ 15 cm 大の砂岩円礫を多く含む。堆積状況から廃絶に当たって括して埋めたものと判断した。

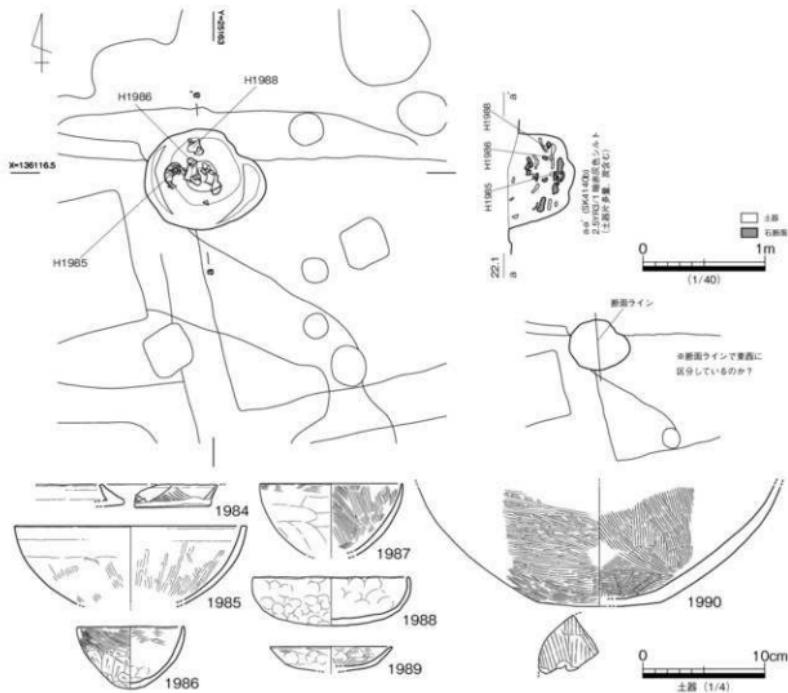
出土した土器は終末期中段階で、その時期の廃絶と判断した。

## (24) SK4408a

4 区南側西端で検出した不整橢円形の土坑である。長軸 1.6 m 、短軸 0.8 m 、深さ 0.25 m で断面形は皿状である。埋土は大きく 3 層に分かれ、1 層目は黒色粘土層で土器が多く出土する。2 層目は基盤土の黄色土ブロックを多く含む一括埋め戻し土である。3 層目は基盤土に近似しやや湯った褐色土ブロックを含む。堆積状況から廃絶に当たっての埋め戻しが底場付近にとどまり、その後周辺の廃棄物と共に比較的短時間で埋積したものと推察する。

1992 は後期初頭の高杯脚部である。端部拡張して四線文の施文を省略する。1991 は近畿系の大形壺口縁部で円形浮文を多用し口縁部が内彎しながら斜め上方へ開く独特の形態を有す。胎土は在地のものだが、形状は南近畿地域の土器に類似する搬入系土器である。1993 は大形器台の体部片で残存部が少なく全形が不明だが、直線と円弧による沈線文を描く。後期前半に属す。1994 は中期後半の甕底部片である。

出土遺物から後期前半古段階に埋没した土坑である。

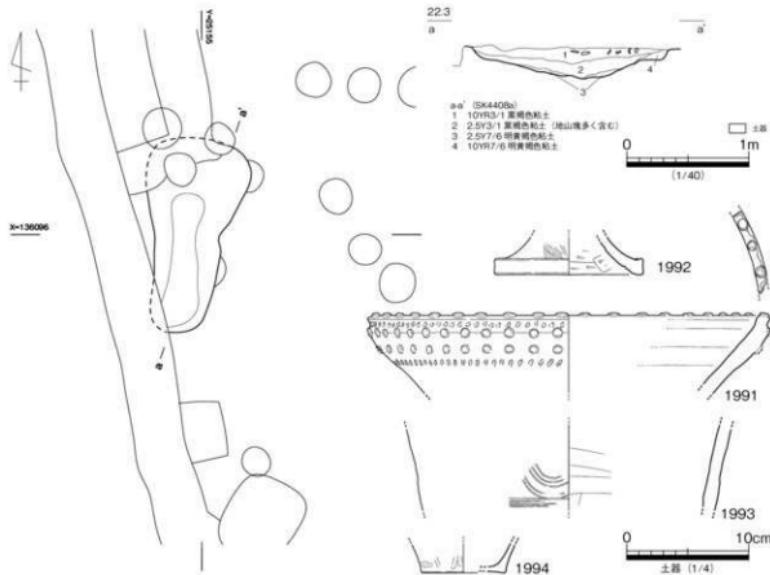


第274図 土坑SK4140b 平・断面図 出土遺物実測図

## (25) SK4489a

4区南西隅で検出した不定形土坑である。検出長1.6m、深さ0.35mの規模で、埋土は黒色粘土で層中に約20cm大の礫と大形の土器が大量に一括投棄されていた。投棄は極めて短時間に行われたものと考えられ出土した土器は良好な一括資料である。

1995・1996・1998は複合口縁壺の三態である。1995は口縁下端に粘土帯を貼付して幅広面を作出し、鋸歯文を施文する。なで肩の胴部から緩やかな屈曲を経て頭部が立ち上がり、さらに緩やかにカーブして外反し口縁部に接続する。器形境の特徴は後期後半の属性を残す。黒雲母・角閃石を含む胎土Hの土器である。1996は球形と推定できる内面口胴部境から屈曲して短い頭部に接続し、さらに屈曲して斜め上方に開いた後、強く屈曲して上方に複合口縁部が立ち上がる形態である。口縁下端はナデ調整により稜線は鋭く、口縁部の上端は面取りし僅かに外傾する。胴部から頭部内面まで全体を丁寧なヘラミガキで器面調整し、文様は施文しない。胴部内面は細かいピッチの指押痕が目立つ。1998は球形と推定できる胴部から強く屈曲して直立する頭部に接続し、さらに屈曲して外反し上下に大きく拡張してA2類の鋸歯文を施文する複合口縁部を作出する。頭部と胴部の境には押捺突帯を有す等、当地域に定石の器形・文様のパターンを揃える。1999は頭部が逆「ハ」字状で口縁が大きく開く形態の広口壺である。

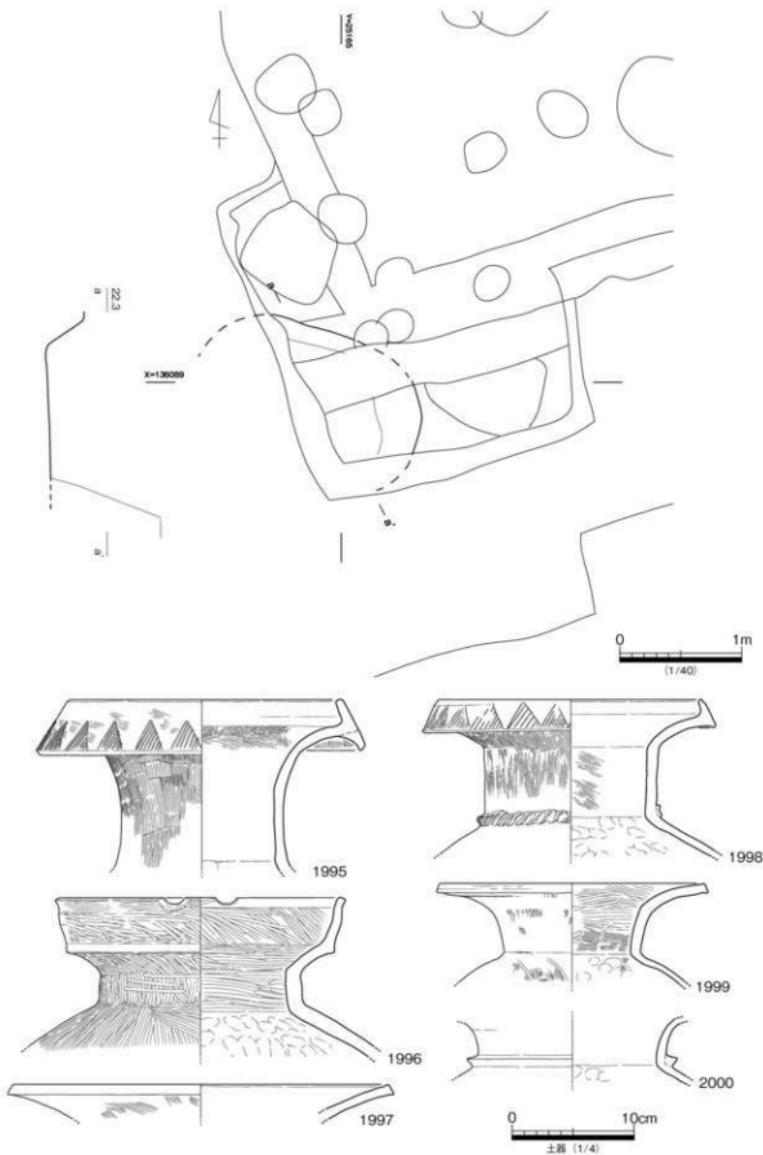


第 275 図 土坑 SK4408a 平・断面図 出土遺物実測図

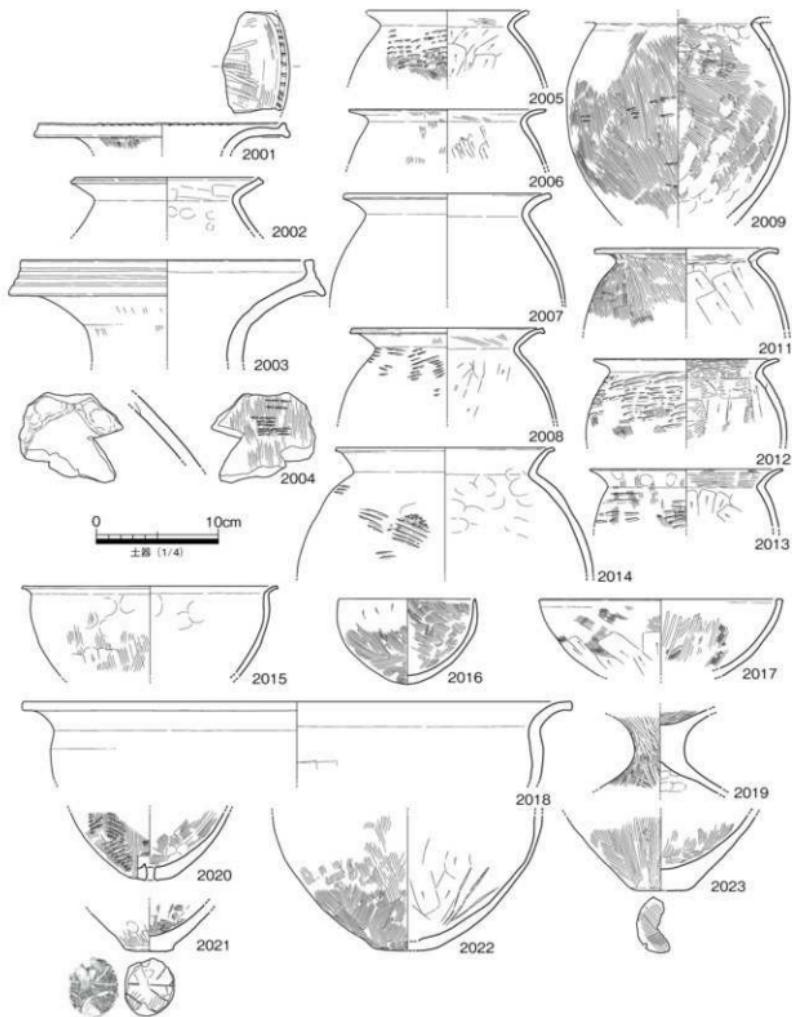
頭部と口縁部の器形境の屈曲はやや緩やかである。2002 は頭部が「ハ」字状で口縁部が斜上方に短く開き、口縁端部は拡張せず細い沈線を施すもので、胴部は遺存しないが、肩がやや張る器形を呈するものと推察する。2003 は壺としたが、器台の最終形態の可能性がある。壺は 2011・2012 のように口縁部と胴部の器形境の稜線が明瞭で口縁部が強く開く形状のものと、2005・2007 のように器形境の稜線が緩いものに分かれ、後者がやや古い要素である。鉢は 2016 の底部が尖り底で、2017 の皿状鉢は口縁端部を面取りする。これらの土器は各所に後期後半段階の属性を残しつつ、終末期に出現する器形の特徴をもつ土器が多いことから、終末期古段階における一括廃棄資料である。

S207 は長さ 15.5cm の方柱状の砂岩自然石の下端を強く研磨し、器軸に対して斜め方向の研磨面を作出した石杵である。下端の研磨面の縁辺と、側面に生じた下方からの打撲作用に伴う剥離面内に朱が付着する。下端の研磨面には打撲作用に伴うとみられる亀裂が生じ、亀裂内にも朱が入り込む様子が観察できる。研磨面の平滑度は高く、旧練 I 報告の 7358 とよく似た # 2000 などの研磨を行っている。7358 の石杵は今回研磨面の粗さ測定を行った。その結果平均粗さは  $8 \mu\text{m}$ 、面の高低差は  $40 \mu\text{m}$  という計測値を得た（第 4 章第 3 節 4 参照）。

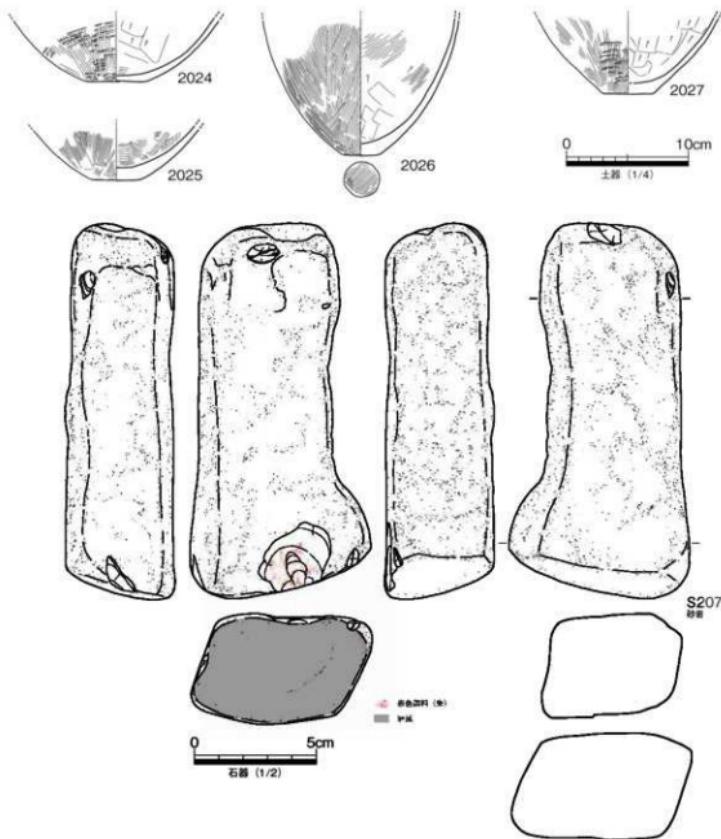
以上の出土遺物から、終末期古段階に廃絶した土坑で、付近の廃棄物を一括して投棄して整地したものと判断した。土坑の本来の形状等が不明であることから、土坑の機能的な側面は推察できない。



第276図 土坑SK4489a 平・断面図 出土遺物実測図1



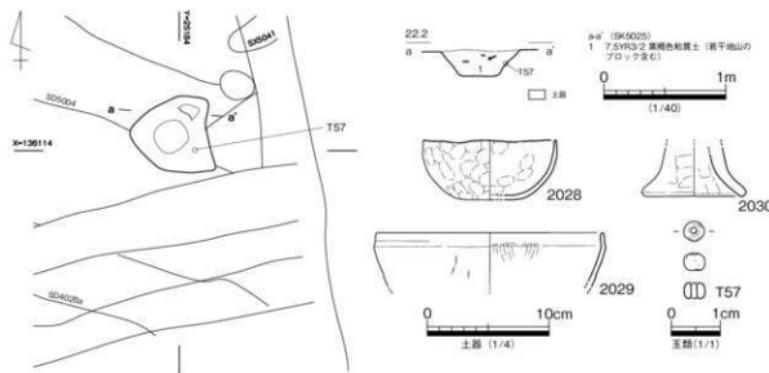
第 277 図 土坑 SK4489a 出土遺物実測図 2



第278図 土坑SK4489a出土遺物実測図3

## (26) SK5025

5 区南東隅付近で検出した小形土坑である。大きさ 0.6 m ほどの不整円形で埋土は基盤層ブロックを含む黒褐色粘土で一度に埋めたものと推察する。2028 は手づくねの薄手の鉢で終末期に属す。2029 は口縁部が曲屈して内傾する異質な形状の鉢で撤入系である。T57 は濃紺系のコバルト着色のカリガラスで製作された小玉である。



第 279 図 土坑 SK5025 平・断面図 出土遺物実測図

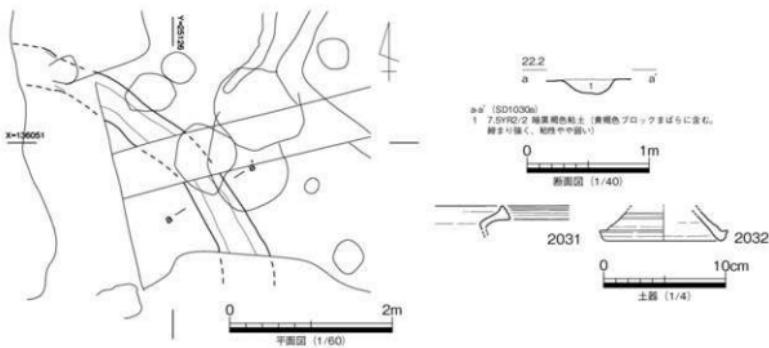
## 第4項 溝

## (1) SD1030a

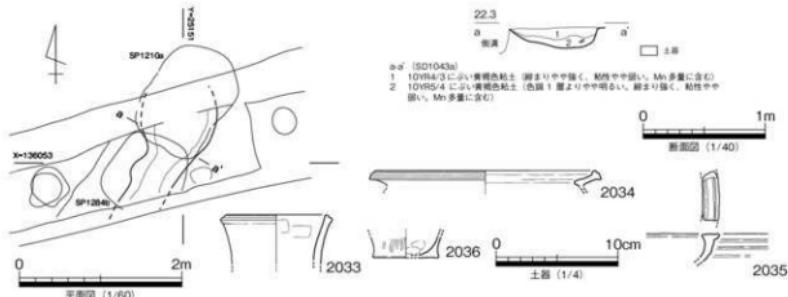
I A 区西端で検出した溝である。幅 0.6 m、深さ 0.15 m、断面は皿形で西側を囲むよう弧を描いて走行し調査区外に延びる。調査区西壁断面では本造構の関連土層と考えられる堆積層が本造構以南に分布しており、調査地西側に予想される堅穴建物等を囲繞する溝の可能性もあるが、むしろ平成 7 年度の研修棟調査区における SD02（後述するが本調査区の SD3153b に接続する溝）の延伸部の可能性が高い。中期の掘立柱建物 SB1348a とは接し、後期の堅穴建物 SH1161a と重複する位置にある。検出面からみて、SB より新しく、SH との先後関係は不明だが、上述の溝に接続するようであれば、SH を切る溝と考えられる。中期後半新段階の土器が出土しているが、本溝に伴うものではなく、終末期新段階以後の造構と推察する。

## (2) SD1043a

1A 区中央南端で検出した溝である。南西から北東に向く、幅 1.1 m 以上、深さ 0.24 m で皿状の断面



第280図 溝 SD1030a 平・断面図 出土遺物実測図



第281図 溝 SD1043a 平・断面図 出土遺物実測図

形である。SH1207a を開続する溝 SD1038a や SH1035a を開続する溝 SD1131a と同方向である。ただし、掘立柱建物 SB1265b と SB1352a を構成する柱穴のちょうど上部にあたることから、本来は両柱穴の埋土上部に振り分けられるべき遺構の可能性が高い。

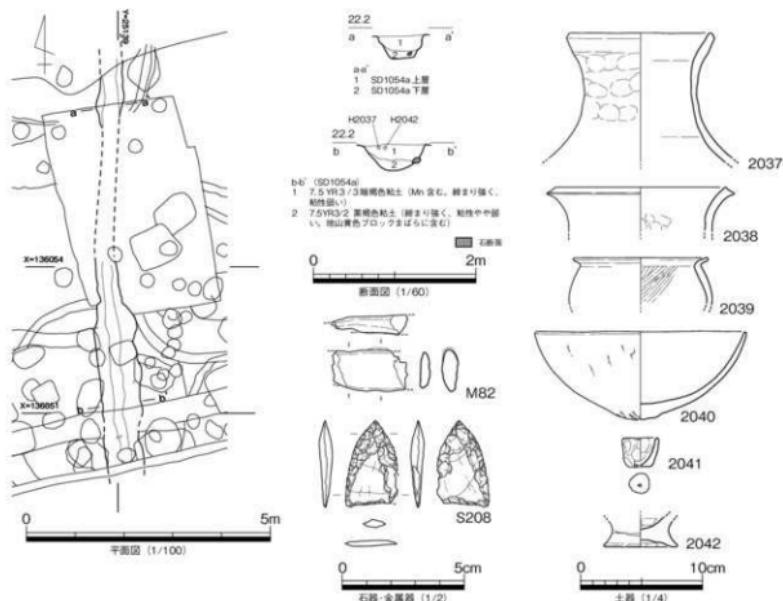
中期後半新段階の土器が出土した。

### (3) SD1054a

I A 区中央付近を南北に縱走する溝である。終末期の堅穴建物 SH1039b より後出し、調査区南端で平成 7 年度研修棟調査区の SD01 に続く。SD01 は弧を描くように東にカーブしており、今回報告する 3 区の南端にある SD3626a に接続し、さらに SD3153b に接続して北上する。東西幅約 50 m の範囲の南北側を開続する溝である。

出土遺物は後期前半から終末期までの土器を含むが、遺構の切り合いから見てすべて外の遺構からの混在品と考えられる。古墳時代以前のすべての重複遺構に対して後出することから、終末期新段階を上限とし古墳時代前期を下限とする時間幅で位置づけておく。

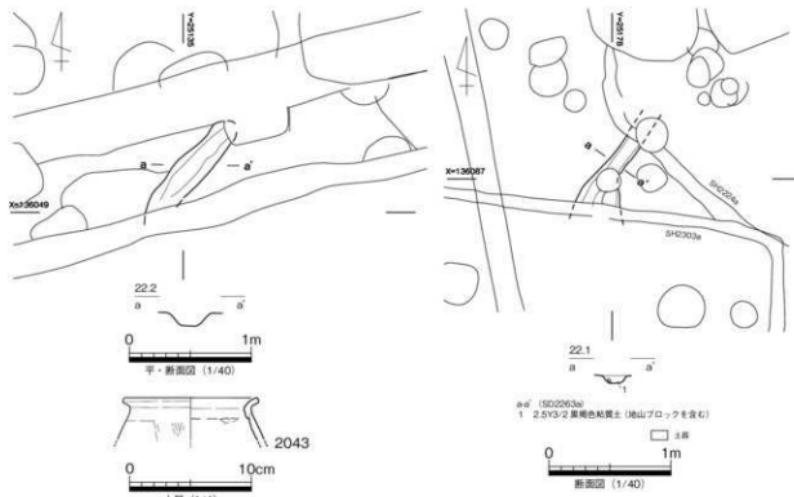
2041 は手づくねのミニチュア鉢で底部は焼成前の穿孔である。M82 は刀子の可能性もあるが、刃部が明瞭でなく板状鉄片とした。



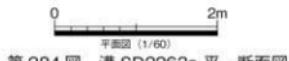
第 282 図 溝 SD1054a 平・断面図

## (4) SD1222a

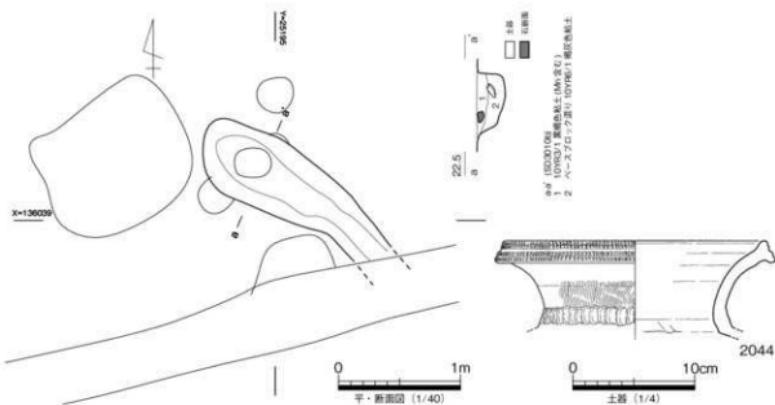
I A 区西側南端で検出した小規模な溝。幅0.3m、深さ0.1mではほぼ直線だが西端で南にカーブしかかっている。豊穴建物の壁溝の可能性がある。2043 の甕は後期後半古段階に属す。



第283図 溝SD1222a 平・断面図 出土遺物実測図



第284図 溝SD2263a 平・断面図



第285図 溝SD3010b 平・断面図 出土遺物実測図

#### (5) SD2263a

2 区中央やや東側で検出した小規模な溝である。豎穴建物 SH2224a と SH2303a の間で両遺構に切られて検出したものである。出土した土器片は小片のみで報告していない。遺構の性格は不明である。

#### (6) SD3010b

3 区南東付近で検出した溝である。南東から北西に向い弧を描き、北西端で幅を広げて浅くなって収束する。最大幅部分で溝幅 0.6 m、深さ 0.23 m の規模である。埋土より中期後半古段階の壺が出土した。遺構の性格は不明である。

#### (7) SD3151b

3 区西側を北上する溝である。1 区の SD1054a 及び平成 7 年度研修棟調査区の SD01 から続く溝で、調査区南端において SD3153b と重複する。切り合い関係を示す箇所は存在しない。調査区南端の断面 f ライン付近で溝の平面形が若干クランクする。

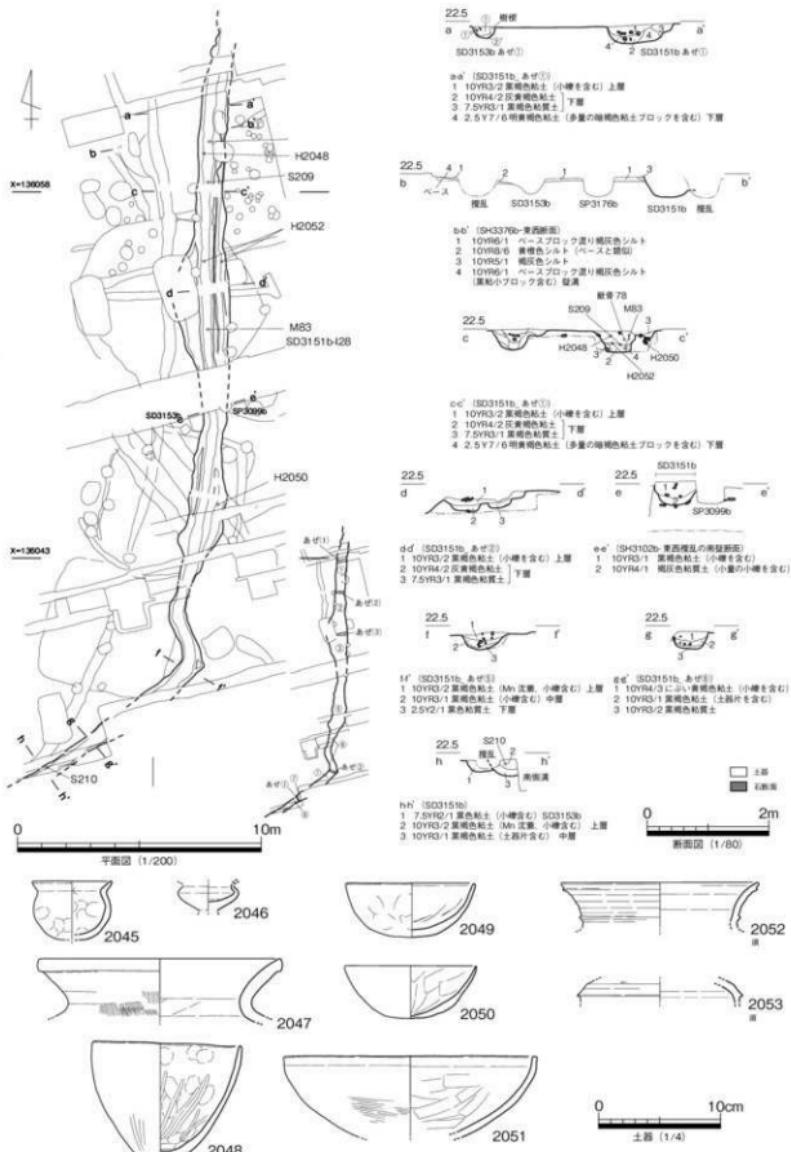
断面観察から埋土は上層と下層の 2 時期に分かれる。そのうち下層は d ラインで顕著だが、さらに 2 流路に区分できる。下層の一つの流路はせいぜい 0.4 ~ 0.5 m の溝幅に収まっており、開削当初は SD3153b と同様に幅の狭い溝で、何度かの改修を経て最終埋没時に幅が 1.5 m に広がっていたものと推察する。各断面図において上層と下層を区分して表示した。出土遺物もその区分を示している。須恵器が 2 点出土した。それらは上層出土だが、2052 は下層出土の破片と接合している。掘り間違いがなければ下層の溝のうち一つの流路 (d ライン 2 層) の埋没は 2052 の須恵器が示す 5 世紀末ごろまで下る。

そのほか M83 の青銅鏡片は下層 (d ライン 2 層) の底場に貼り付いて出土したものである。以下出土遺物を説明する。

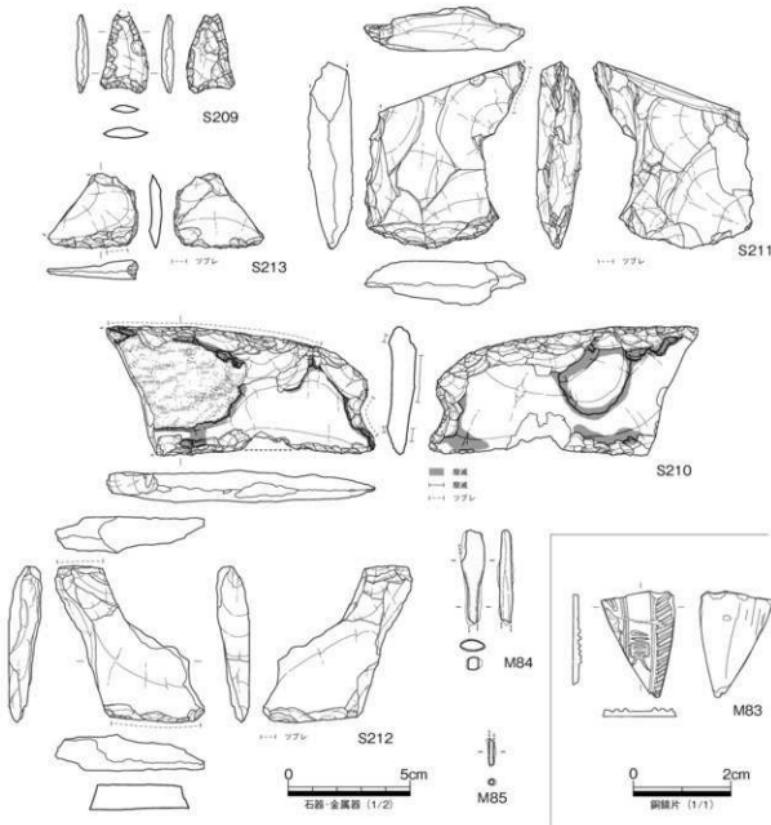
2045 は丸底の小形壺である。古墳時代に通有の形態で上層掘削に伴う。2046 は終末期の台付小形丸底壺である。終末期古段階に属す。2047 は終末期から古墳時代前期に続く頸部が矮小化した壺である。2048 ~ 2051 は直口鉢で終末期から古墳時代前期に続く器形である。2052 は須恵器壺で、口縁直下と頸部下方に細い突線を貼付する形態で 5 世紀末ごろに位置づけられる。上層で出土した 2053 は口径約 13cm の同時期の杯蓋である。

S209 ~ S212 はサヌカイト製の石器である。そのうち S210 は稜線付近を中心に磨滅が残る打製石庖丁である。

M83 は青銅鏡である。舶載の方格規矩四神鏡若しくは細線式獸帶鏡の破鏡で、紋様外端の微小部と銘帯、そして櫛歯紋帯までを含む細長の三角形を呈す。現存法量は長さ 22cm、幅 1.5cm、厚さ 0.19cm である。内外区境付近の小破片で、内区の主文を構成する細線及び隆起が僅かに残り、圓線間の銘文と外区の櫛歯文帯が確認できる。櫛歯文帯は細かいピッチの右上がり斜線である。銘文は「鏡」を示す一文字「竟」をやや内側に偏って陽鋲する。字体は簡略化した隸書体で、「立」部首は「二」と省略される。岡村秀典による字体分類 (岡村 1984) では王莽代以後とされる「字体 1」にあたる。「竟」の上 8 mm で破断部に至る。したがって銘文の文字間隔 8 mm 以上で配字される銘文の文字数が少なめの個体と推察する。面径は残存部が少なく復元は難しい。鋲上りは良いが、鋲造時に生じた鋲型のひび割れが、紋様部から銘文の 2 mm 上を通過し櫛歯文帯まで斜めに入る。周縁の破断面は研磨され、破断時の稜線は鋭くはない。文様面には研磨や磨滅は及ばないが、表の鏡面は細い傷が認められる。文様面の蛍光 X 線



第286図 溝 SD3151b 平・断面図 出土遺物実測図 1

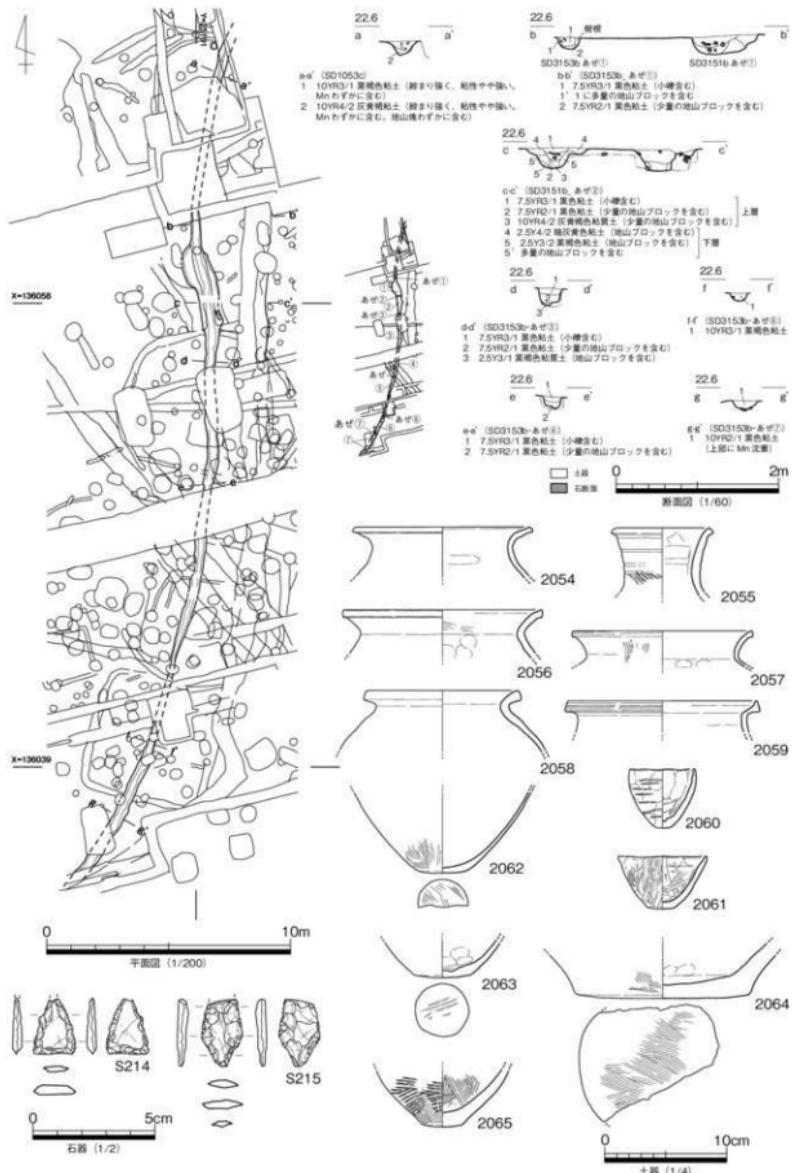


第 287 図 溝 SD3151b 出土遺物実測図 2

分析を実施し微細な付着物の有無を調べた（第 4 章 6 節 3）が、マッピングにおいても異質な元素のピークはみられなかった。銘文及び文様構成から王莽代に製作が開始された岡村編年 IV 式から後漢期の V 式に該当する（岡村 1993）。

M84 は小形の柳葉形鉄鎌である。先端・基部が折損する。刃部左右縁は古い破断面である。M85 は鉄針の先端部片である。折損し破断面が摩耗する。

以上の出土遺物から本溝は下層が弥生時代終末期を上限として古墳時代まで使われ、上層が古墳時代中期末ごろに再掘削された当調査範囲の南半分を囲繞する溝と判断した。



第288図 溝SD3153b 平・断面図 出土遺物実測図

(8) SD3153b

SD3151b の西側に平行して走行する溝である。溝幅 0.3 ~ 0.5 m で深さ 0.15 ~ 0.25 m をはかる。3 区南端で SD3151b と交差し、旧練 II (第 19 次調査) の SD129、平成 7 年度研修棟調査区の SD02 に続き、1 区の SD1030a に接続する。埋土は上下層に分かれる。

出土遺物は後期前半から後期後半までの土器を含むが、遺構の切り合いから見てすべて他の遺構からの混在品と考えられる。古墳時代以前のすべての重複遺構に対して後出することから、開削時期を終末期新段階とし、埋没時期を古墳時代前期を下限とする時間幅で位置づけておく。

(9) SD3297a

3 区中央やや西寄りで検出した溝である。北北東方向に走行し、溝幅がやや広がり浅くなつて収束する。本体部の溝幅は 0.7 m、北端で 1.2 m、深さは 0.3 m で断面形は皿状である。何らかの建物遺構を囲繞する溝の可能性があるが、遺構の性格は明確でない。

後期前半古段階の土器が出土していることから、その時期に埋没したものと判断した。

(10) SD3604a

3 区中央付近で検出した直線溝である。溝幅 0.4 m、深さ 0.08 m で SH3726a に切られる。SH3474a とも重複するが、先後関係は明確でない。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

(11) SD3626a

3 区南端で検出した溝である。平成 7 年度調査の研修棟調査区 SD01 から接続する溝で、SD3151b に接続する。出土遺物は周辺遺構の土器を巻き込み、後期前半以後の土器が含まれるが、同一溝の SD3151b の検出状況から弥生時代終末期新段階から古墳時代前期にかけて機能した溝と判断した。

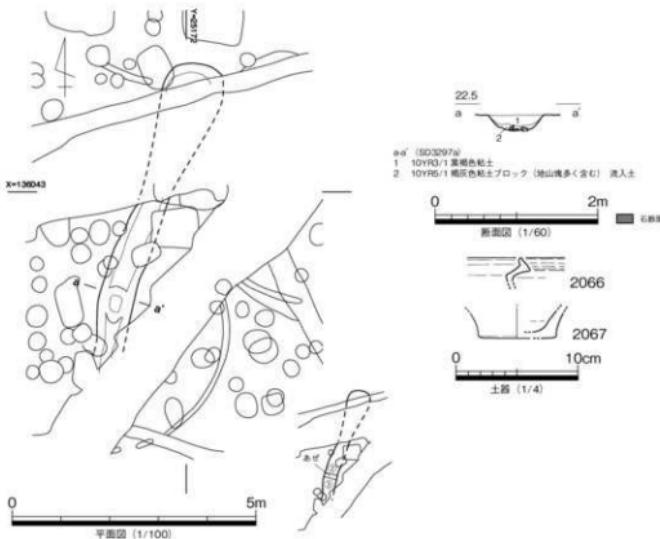
2068 は口縁部を大きく抵張る壺又は器台である。凹線文を施文する。2071 の高坏裾端部上面には原体刺突文が回る。S216 ~ S218 はサヌカイト製石器である。

(12) SD3864a

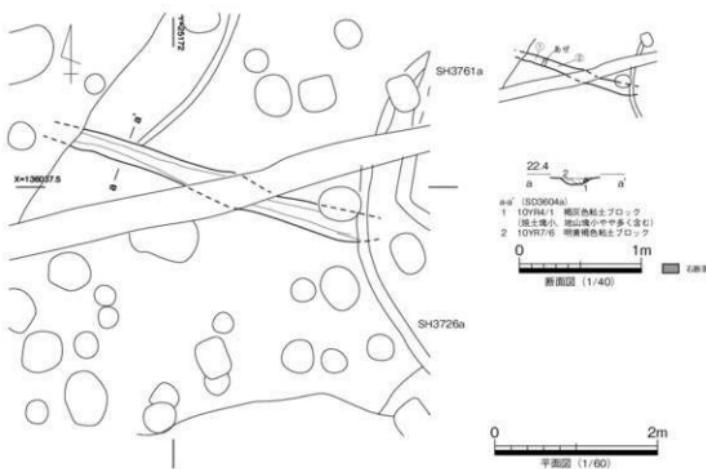
3 区中央やや東よりで検出した直線溝である。溝幅 0.45 m、深さ 0.23 m で延長 56 m を検出した。主軸は東から 12 度南に偏る方向である。黒色粘土で埋没しており出土遺物もほとんどないことから、SD3151b や SD3153b に類似する。すべての弥生時代遺構に後出しており、古墳時代前期ごろに機能した溝であろうか。出土遺物は小片のみで、報告できるものはない。

(13) SD4035b

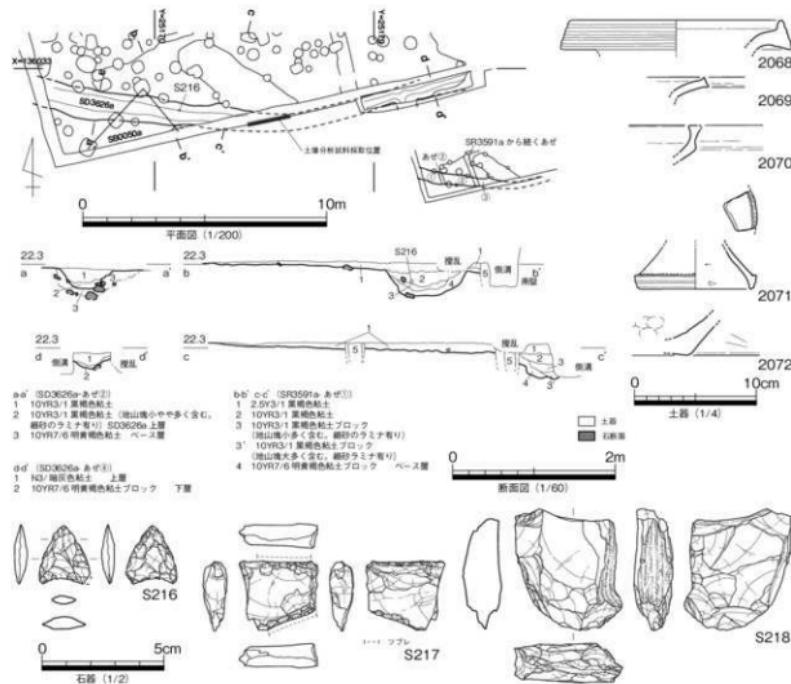
4 区北西付近で検出した溝である。溝幅は 0.65 m、深さは 0.1 m で、条里溝 SD4002 と同一方向で走行するため中世以後の可能性もあるが、埋土が暗褐色系で弥生時代ごろの遺構と共通することからここで報告する。ただ、出土遺物はなく詳細な時期決定は不可能である。



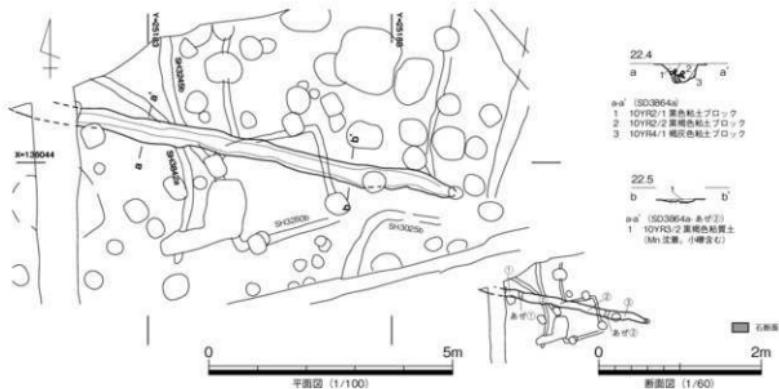
第289図 溝SD3297a 平・断面図 出土遺物実測図



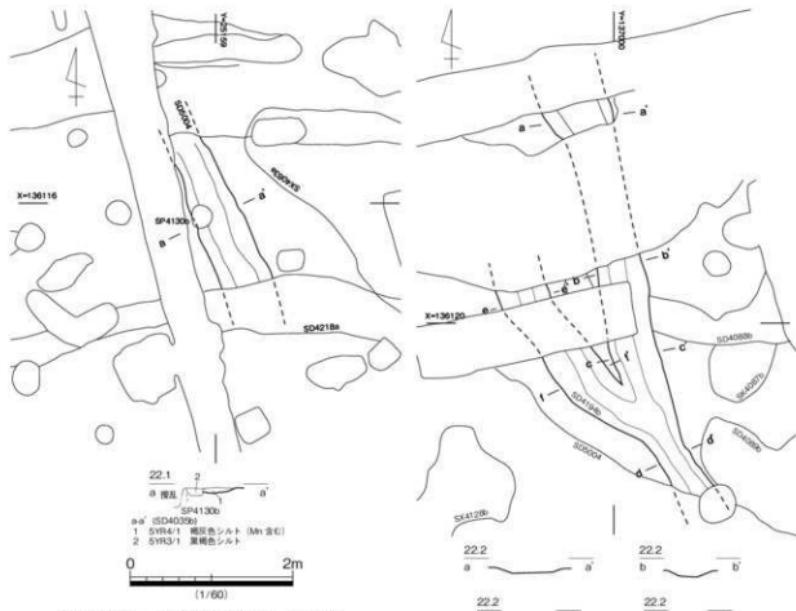
第290図 溝SD3604a 平・断面図



第 291 図 溝 SD3626a 平・断面図 出土遺物実測図



第 292 図 溝 SD3864a 平・断面図



第293図 溝 SD4035b 平・断面図

## (14) SD4084b

4区中央北側を蛇行・分岐しながら北に流下する自然流路に近い溝である。溝幅が0.4～0.6mで深さは0.1mと浅い。出土遺物がなく所属時期は不明である。



第294図 溝 SD4084b 平・断面図

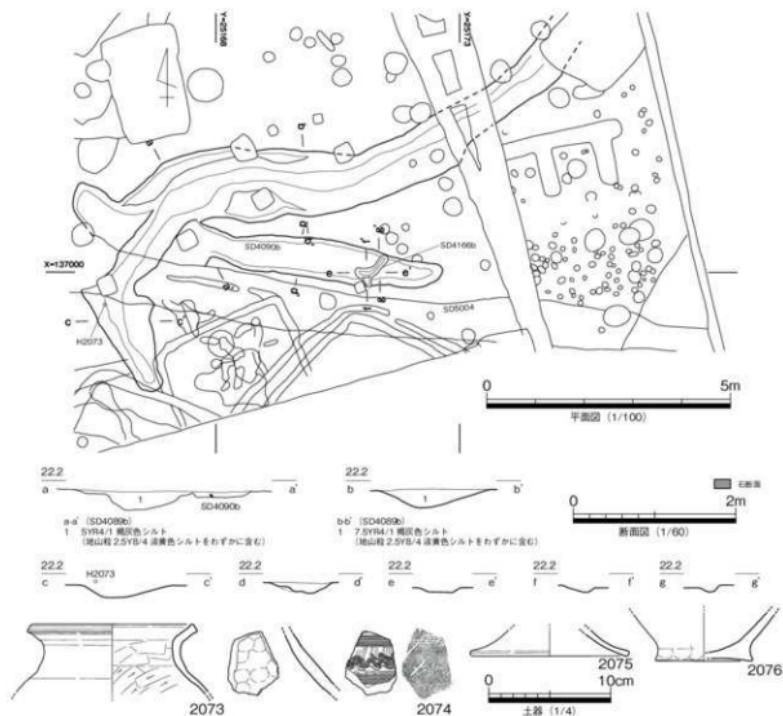
## (15) SD4089b

4区北東側を蛇行・分岐しながら北東に流下する自然流路に近い溝である。溝幅が0.7～1.0mで深さは0.3～0.4mの規模である。断面形は浅い皿状で褐色系シルトによって埋没する。

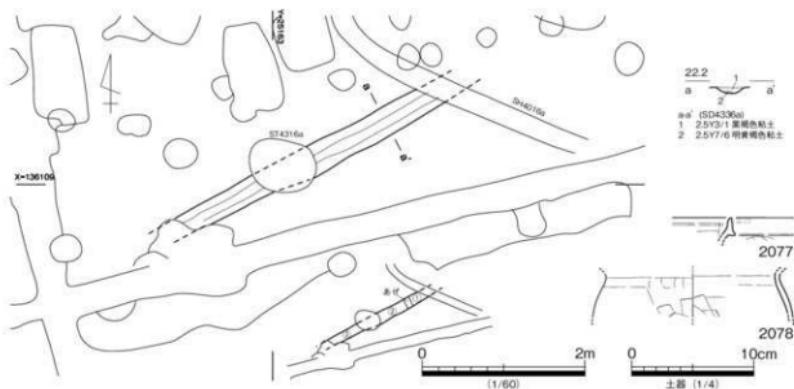
出土土器は後期前半から後期後半古段階の時期幅の大きい土器が出土するが、他遺構からの混在品と考えられる。

## (16) SD4336a

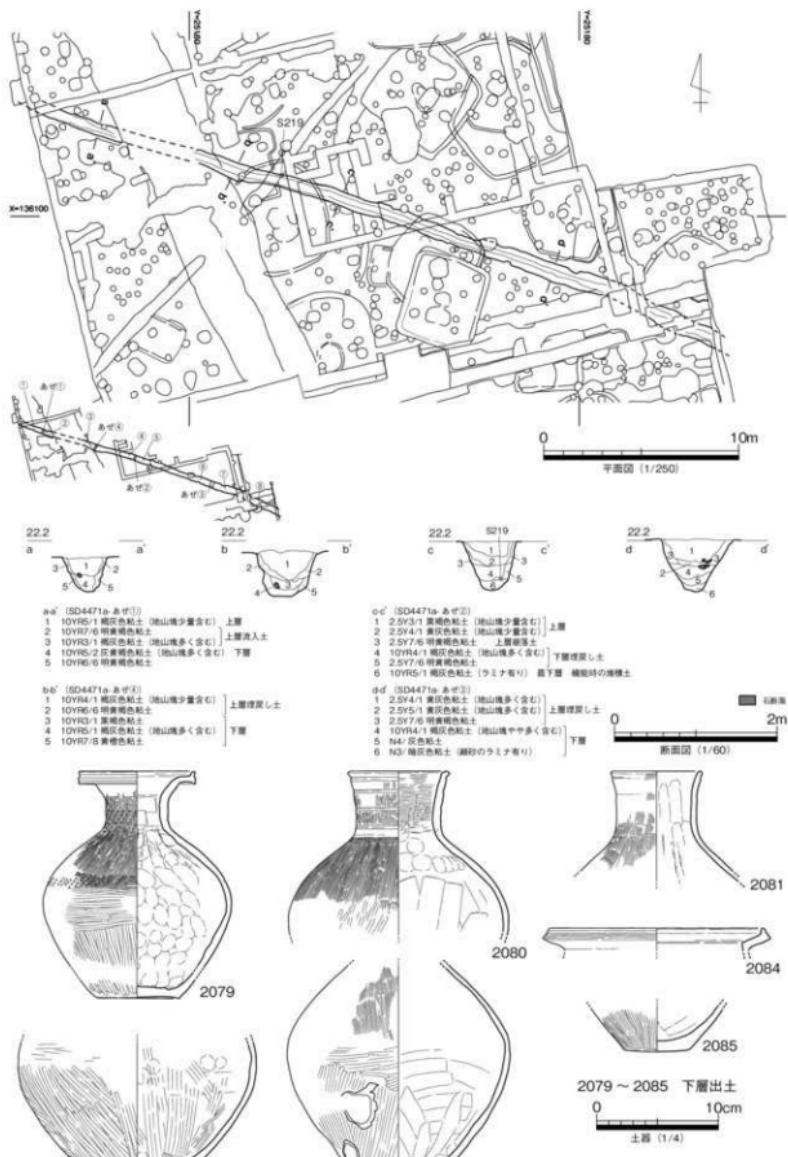
4区西側中央付近で検出した直線溝である。溝幅0.35、深さ0.1mの規模で、埋土は黒褐色粘土である。終末期の竪穴建物 SH4016a や土器墓 ST4316a に切られる。2077は在地胎土だが形態的には吉備系の甕である。口縁下端部が突出する形態が特異である。2078は口縁胴部境の内面稜線が明瞭でない甕である。出土遺物は後期後半古段階に位置づけられる。



第 295 図 溝 SD4089b 平・断面図 出土遺物実測図



第 296 図 溝 SD4336a 平・断面図 出土遺物実測図



第297図 溝SD4471a 平・断面図 出土遺物実測図1

切り合い関係からみても、溝の埋没時期は後期後半古段階と考えられる。

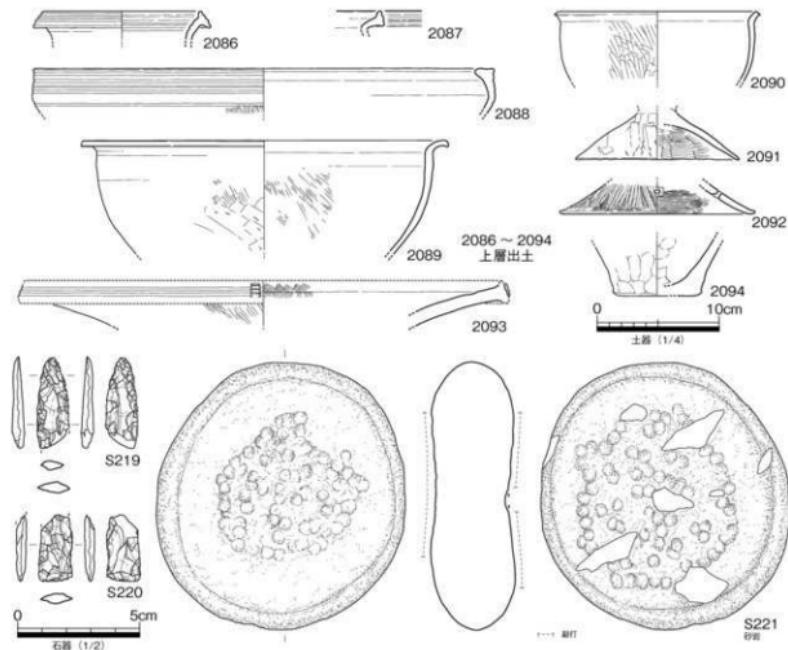
### (17) SD4471a

4 区を南東から北西へ、斜直線で走行する、溝である。断面形は明瞭な「V」字を形成し、溝幅 0.9 m、深さ 0.65 m を測る。延長 15 m 分を検出した。また同一溝と推定される溝が平成 5 年度調査の保育所用地調査区で検出されておりほぼ完形の四線文施文の鉢が出土している。

埋土は上下 2 層に分かれ、下層に基盤土ブロックの混入等一度に埋め戻した痕跡が残るのに対して、上層（1～3 層）は時間経過とともに漸次堆積した痕跡がある。

2079～2081 は下層出土の壺である。広口壺、細頸壺があり胴部の大きさはほぼ等しい。中期後半新段階に属す。2084 の壺は口縁部を主に上方に拡張し四線文を施文する。同時期である。2086～2094 は上層出土の土器で後期前半新段階を下限とする土器である。重複する大形の掘立柱建物 SB4566a が後期前半新段階に廃絶していることから、建物と重複する部分を先行して埋め戻している可能性や上層と下層の間に一旦完全埋没があり、その後同じ位置を開削したとする考え方を排除すれば、後期前半新段階の時間幅で本溝の埋没と建物 SB4566a の構築、そして廃絶までが行われたものと推察できる。

なお、S219 のサスカイト製石錐は下層、同 S220 は上層、砂岩製凹石は上層で出土したものである。

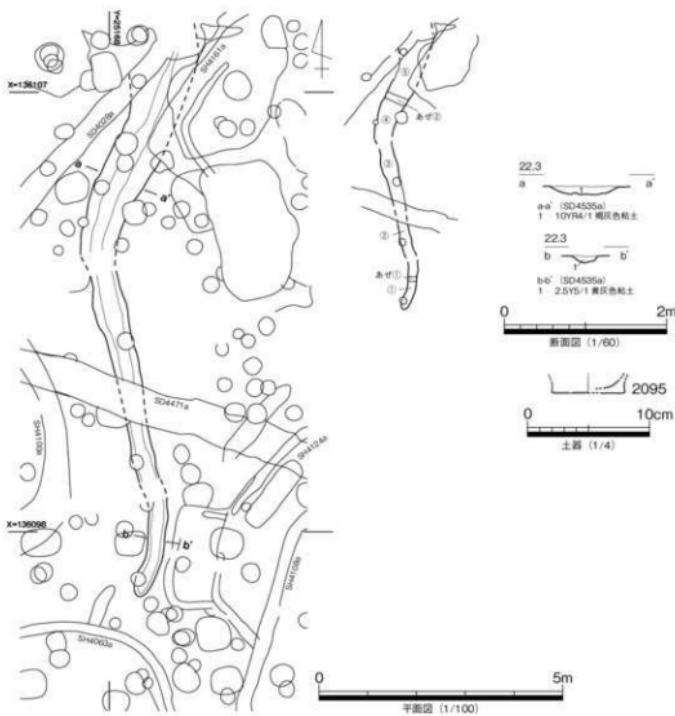


第 298 図 溝 SD4471a 出土遺物実測図 2

## (18) SD4535a

4区南半でやや蛇行しながら北に流下する溝である。溝幅0.3～0.8mで北ほど幅広い。断面は浅い皿状である。SD4471aと交差・重複しており、SD4471aが完全に埋没した後期前半新段階以後に開削されたものと考えられる。後期後半の堅穴建物SH4124aに近接するが、微妙に重複せず建物突出部の西壁に沿って溝が掘削されている一方で、後期前半新段階の堅穴建物SH4100aと近接する部分は1.2mの間隔を5mにわたって維持しながら走向することから、後者と同時期に存在した可能性が高い。

出土した土器は中期後半の壺底部だけだが、SH4100aと同時期であれば後期前半新段階に属す溝との推察が可能である。



第299図 溝 SD4535a 平・断面図 出土遺物実測図

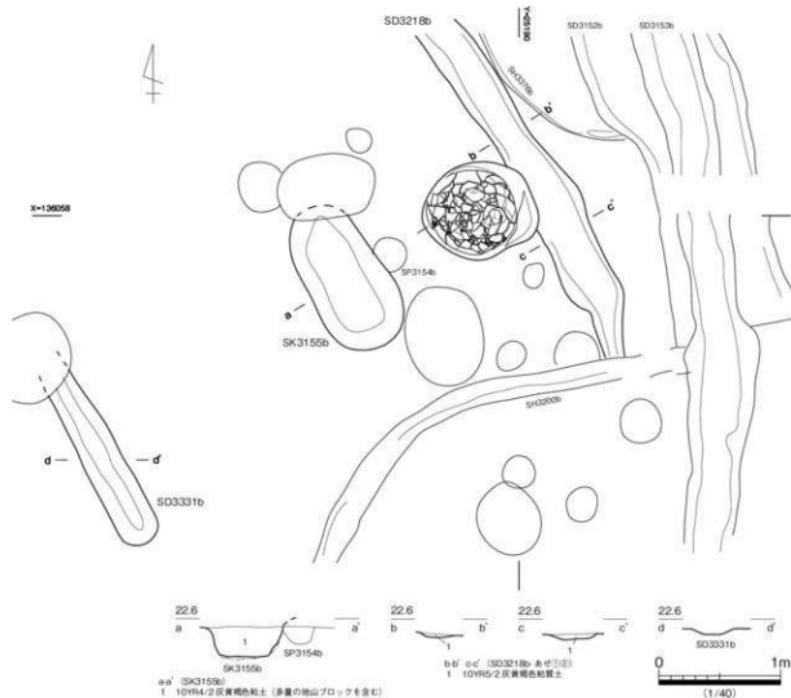
## 第 5 項 墳墓

## (1) ST3199b

3 区北西付近で検出した土器棺墓である。周辺には関係性が推察される土坑や溝も分布する。合わせて報告することとする。

本土器棺墓は長軸 0.9 m、短軸 0.82 m の円形の墓坑をもつ土器棺墓である。墓坑の断面は棺材の底部側がほぼ垂直の側壁をもち、口縁側は土器の形状に沿って掘削した後、0.15m の小段を介して再び垂直に立ち上がる形状をもつ。

棺材は口縁部を打ち欠いた土器を斜め約 45 度に傾けて墓坑内に置いたもので、主軸は東から 17 度南に偏った方向である。打ち欠き部が別の土器を使った蓋材で覆われ、その上に 10cm ほどの礫を置いて埋められる。棺材内部の断面記録によると、底面には遺体の腐敗等に伴う軟弱土壤が厚さ 7cm ほど堆積しており、その上部には明瞭な層境を経て左上方から土砂が流入した痕跡が明瞭である。これは上部からの土圧等により打ち欠き部付近から棺材が破損して蓋材や礫が内側にずれ、a ライン左側の破損部から図の右下方向に土砂が押されながら堆積したことを示すものである。墓坑の東側の小段は a ライン

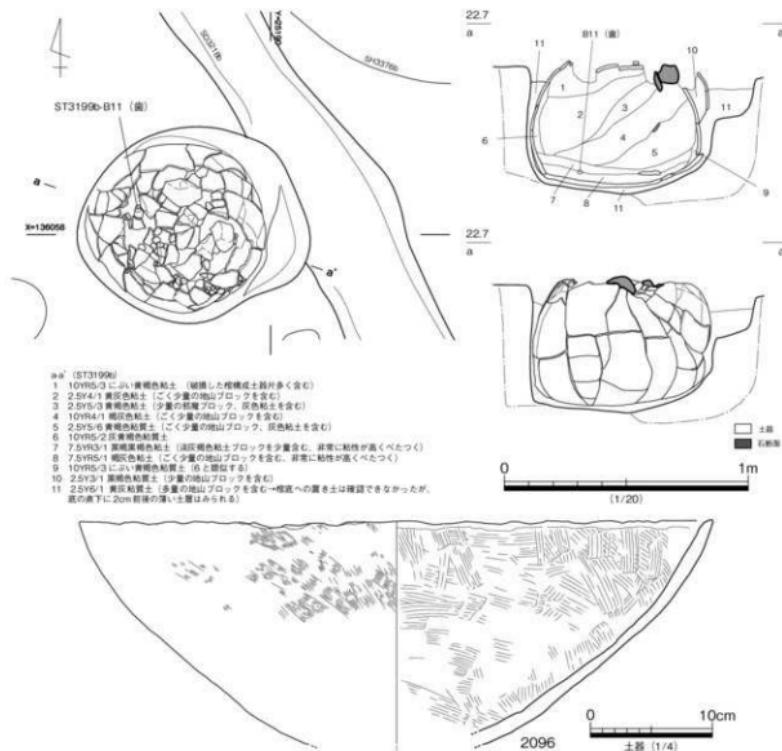


第 300 図 墳墓 ST3199b 平・断面図

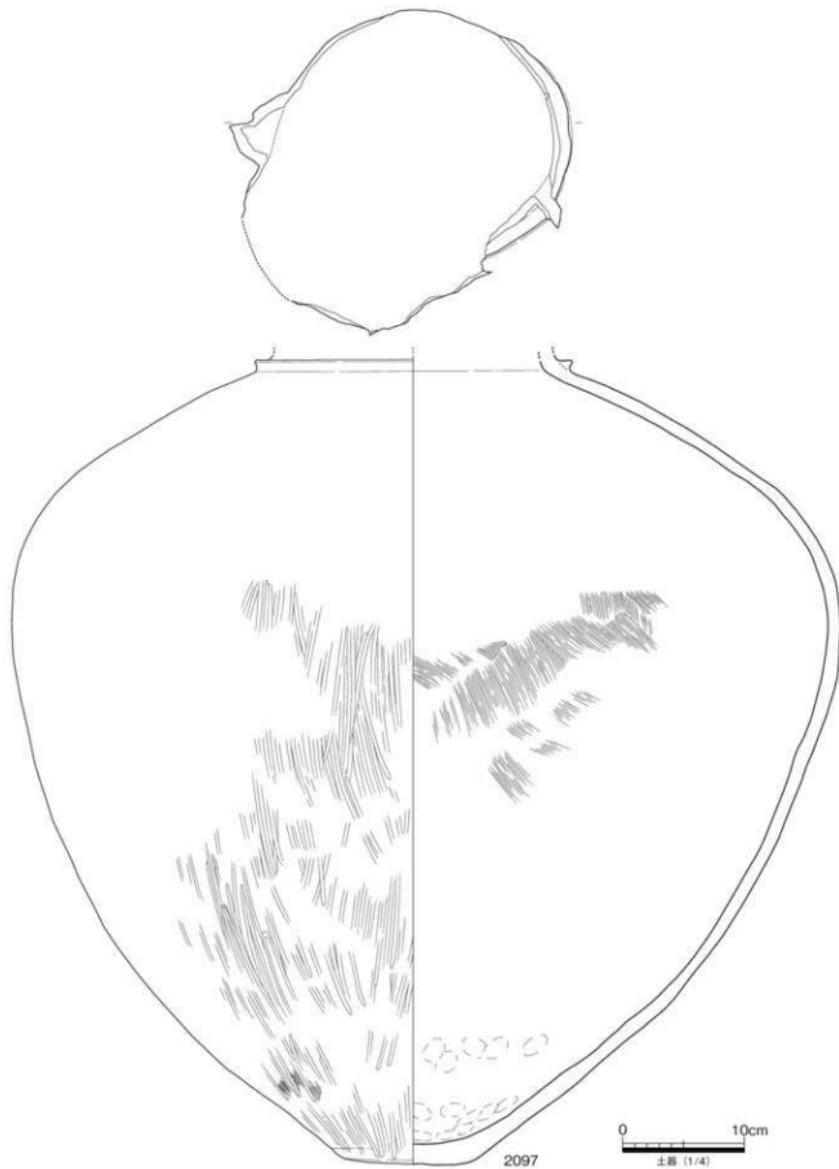
断面を見るとちょうど蓋が元々設置されたあたりにあり、棺材の土器の形状に応じて墓坑が掘削されたことがわかる。このことから、墓坑の掘削は実際に棺材の土器を置いて形を合わせながら行ったものと推察できる。

なお、棺底面に堆積した軟弱粘土中にヒトの歯牙1体分が含まれていた。第4章第7節2に掲載した鑑定の結果、被葬者は2歳±6か月程度と推測された。

2096が棺蓋、2097が本体の棺材である。2096の棺蓋上端は土器成形時の粘土帯接合面を仕上げ調整せず焼成しており、明橙色を呈する通常の土器表面と変わらない色調となっている。大きさや形状をみると、本体の棺材である2097の大形壺の底部付近の形態とはほぼ一致することから、当初は壺体部として底部から体部下半まで成形しその後土器棺の蓋として使用するためにそのまま焼成し準備したものと推察する。2097の本体の棺材は肩が張り頸部下半は若干膨らみを持ちながら底部に至る器形で、底部は体部と比べ厚みを増すことなく緩やかな稜線を介して頸部下端から平底に移行する。頸部下端に断面三角形突帯を貼付し、それより上位は打ち欠いて遺存しない。打ち欠き範囲と形状は長径27cm、短径



第301図 墓 ST3199b 平・断面図 出土遺物実測図1



第 302 図 墓 ST3199b 出土遺物実測図 2

20cmの楕円形で、埋葬遺体の大きさをある程度反映するものである。蓋・本体ともに土器の胎土は粗い花崗岩風化に伴う砂粒を含み、赤色粒子が混じる橙色系の胎土を呈しており、本遺跡近辺で製作された土器と考えられる。どちらの土器も後期後半古段階に属する土器である。

以上の土器棺 ST3199a は木棺墓の可能性を推察した土坑 SK3155b の東 0.4m の位置で並ぶように配される。上述のように SD3331b と SD3218b を木棺墓を取り巻く周溝と仮定すれば、一辺 4m の方形の低墳丘が想定できる。本土器棺墓はその低墳丘の東低縁部に構築された墳墓の可能性が指摘できる。その南側では終末期の堅穴建物 SH3200b と墳丘南縁が重複し、周溝と想定される SD3218b が堅穴建物 SH3200b に切られていることから、墳墓の構築は土器棺材が示す後期後半古段階とみて矛盾はない。

## (2) ST3513a

3 区中央西端で検出した土器棺墓である。中期から後期の遺構が多数重複する一角にある。墓坑は後期前半古段階の掘立柱建物 SB3915a の構成柱穴の一つをほぼ完全に破壊し、後期の堅穴建物 SH3439a の中央土坑 SK3454a の掘削によって棺蓋材の一部が破損を被っている。なお堅穴建物の所属時期は明確ではないが、その中央土坑ではサヌカイトの大形剥片が出土しており、後期後半に下るとは考えにくくことから、後期前半の時間幅において小刻みに遺構が重複して景観が変化した場所にこの土器棺墓が構築されている。

墓坑は長軸 1.35m、短軸 1.05m の楕円形で主軸は北から 26 度東に偏った方向に設定される。底部側を垂直に掘り、口縁側が棺材の土器形状に沿って掘削され棺材中ほどで 0.65m の長さの大きめの段をもつ。棺材の大きさに比べ墓坑の規模が大きい点で、旧練 II 報告の ST03 に類似する。

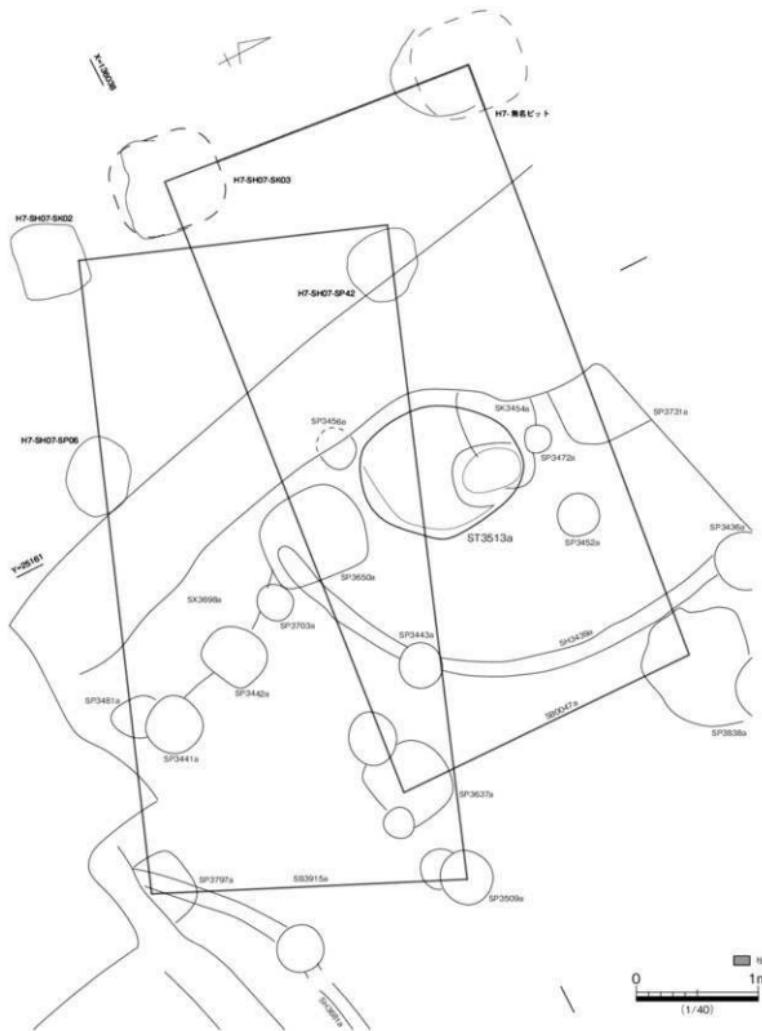
2098 は棺蓋の大形鉢、2099 は棺本体の壺である。2098 は体部下半が底部に向かって細く窄まり、底部は安定した平底である、体部上端は一旦内彎した後、強いカーブで外反し口縁に至る。口縁端部は外面に肥厚し面取りを行い、幅広い片口部を有す。外面は粗いハケ調整だが、体部内面及び口縁部内面は丁寧なヘラミガキ調整によって平滑にする。2099 の棺本体は大形壺体部である。倒卵形の体部に底部は下方にやや突出する厚めの安定した平底を呈す。胴部上半は粘土帶接合痕が顕著に残り、指押さえによる接合補強が行われる。頭部との接続部は残存しないので形状は不明。胴部外面はタタキ調整後ハケ調整を行い、部分的にヘラミガキ調整を行う。これらの土器は大形鉢の口縁部拡張が顕著で壺底部が突出気味であることから後期前半に位置づけられ、同壺胴部下半の器形からその新段階にあたる。つまり、本土器棺墓の上部に構築された堅穴建物 SH3439a とはあまり大きな時間差は認められないと考えられる。

なお、棺の覆土中より S222 の安山岩板石が出土した。側縁は意図的に分割した痕跡があり、表面に絵画風の線状痕が残る（写真図版 146）。施文が意図的かどうかは不明である。

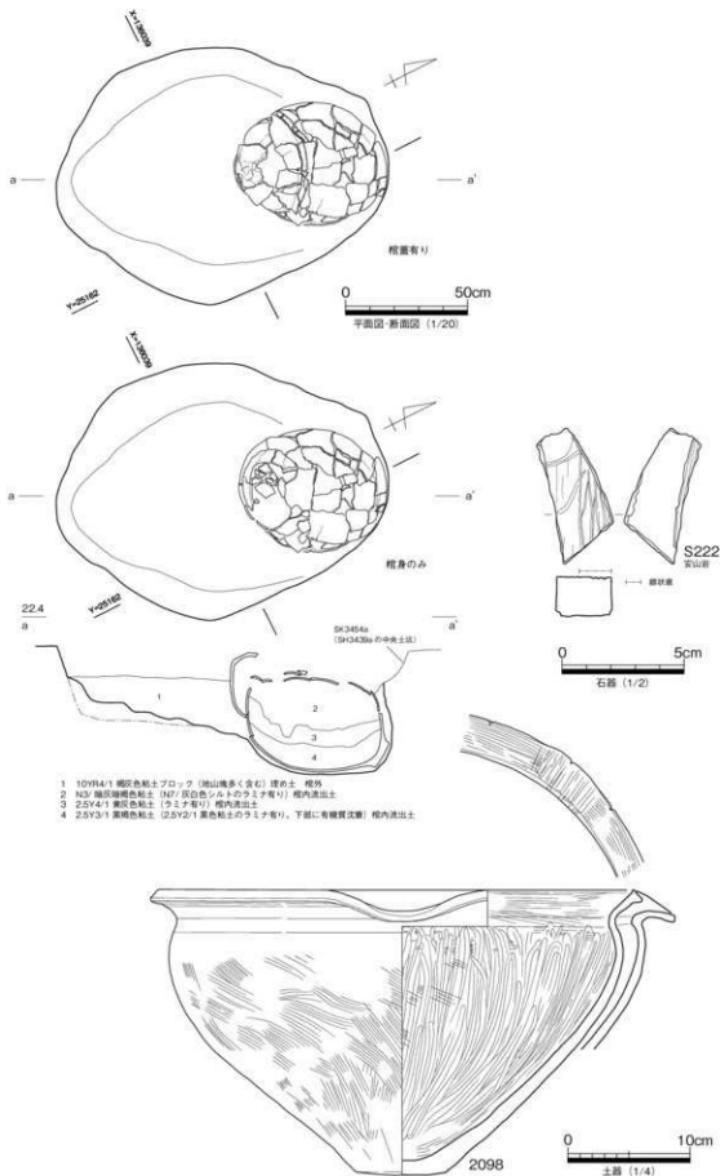
以上の出土遺物より当土器棺墓は後期前半新段階に構築された墳墓と判断した。

## (3) ST4122b

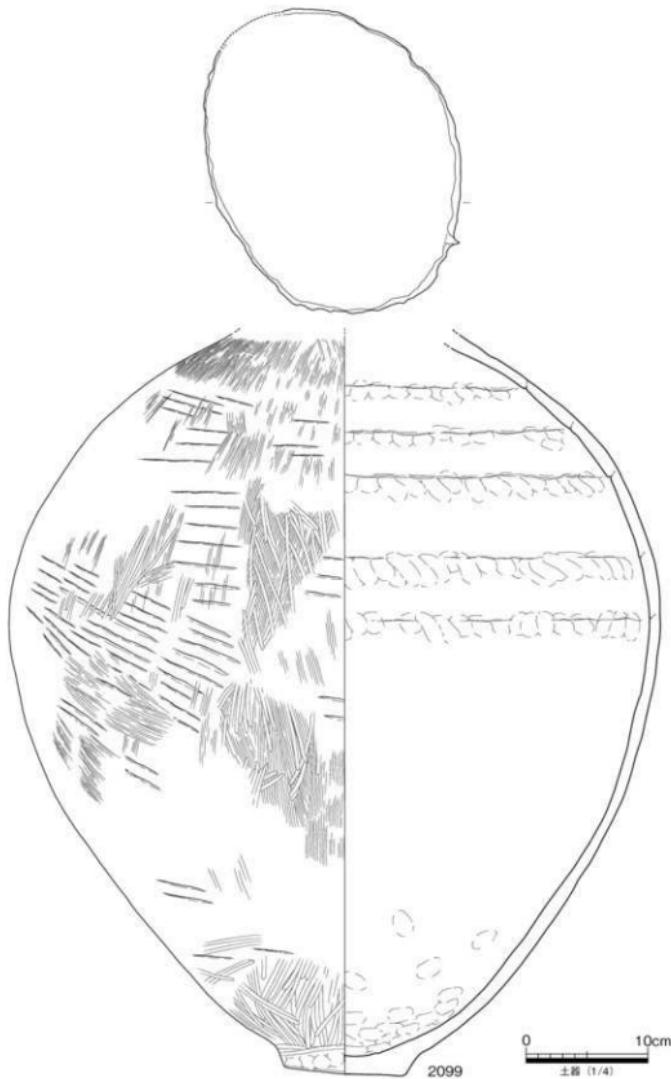
4 区中央北側で検出した土器棺墓である。後期後半新段階に廃絶した堅穴建物 SH4121b の埋土を切って構築する。墓坑は直径 0.55m の正円形で深さは 0.25m の規模である。土器を斜めにして墓坑に安置し、墓坑底面は土器の形状に沿わせて掘削して整形する。主軸方位は北から 48 度東に偏った方向で、蓋材は確認できなかった。



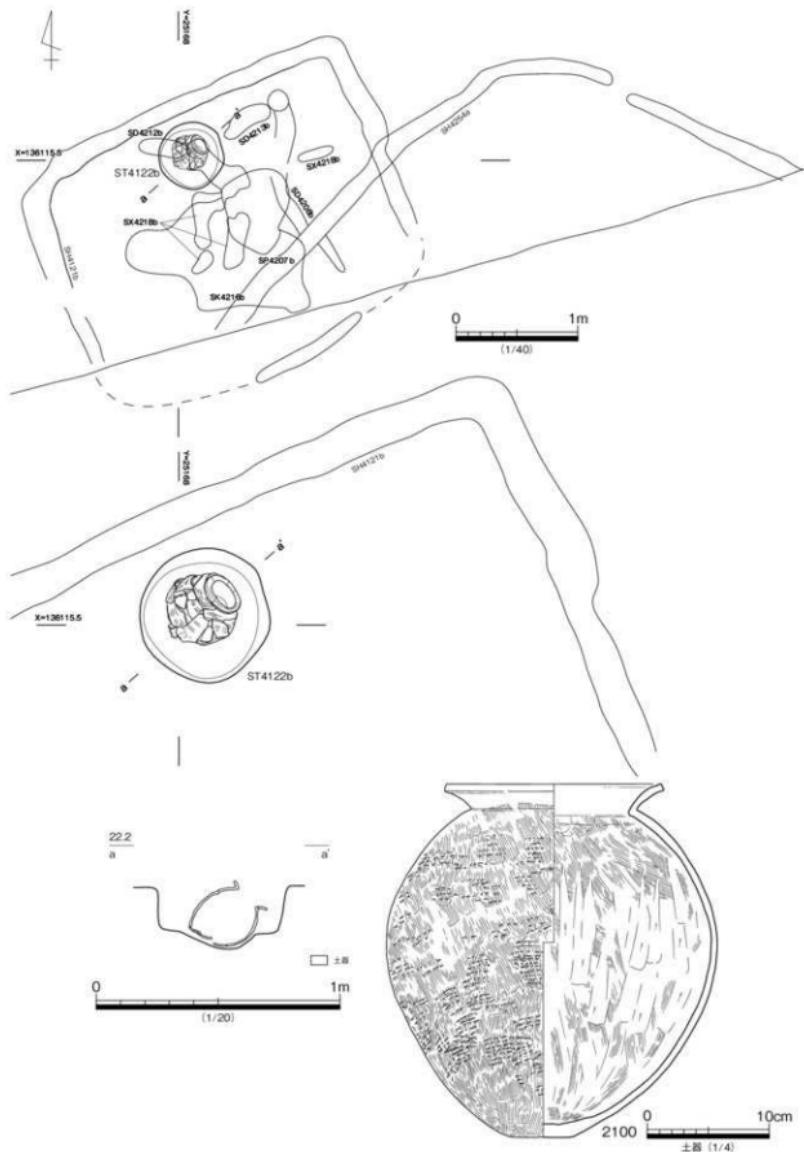
第 303 図 墳墓 ST3513a の位置関係



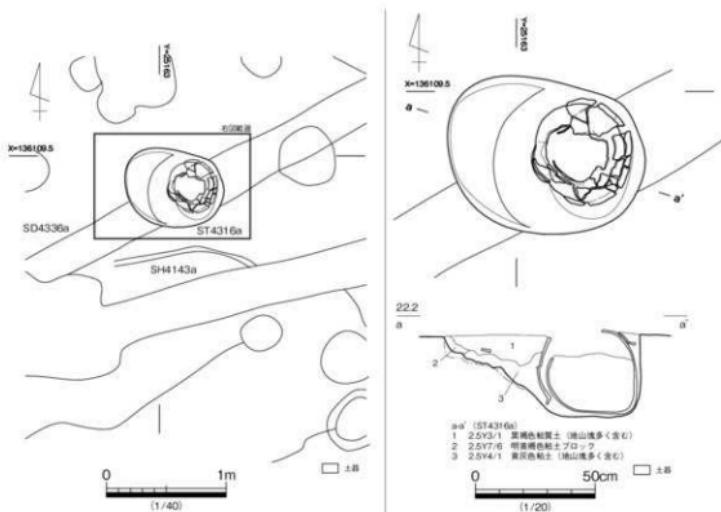
第304図 墳墓ST3513a 平・断面図 出土遺物実測図1



第 305 図 墓 ST3513a 出土遺物実測図 2



第306図 墓ST4122b 平・断面図 出土遺物実測図



第 307 図 墳墓 ST4316a 平・断面図

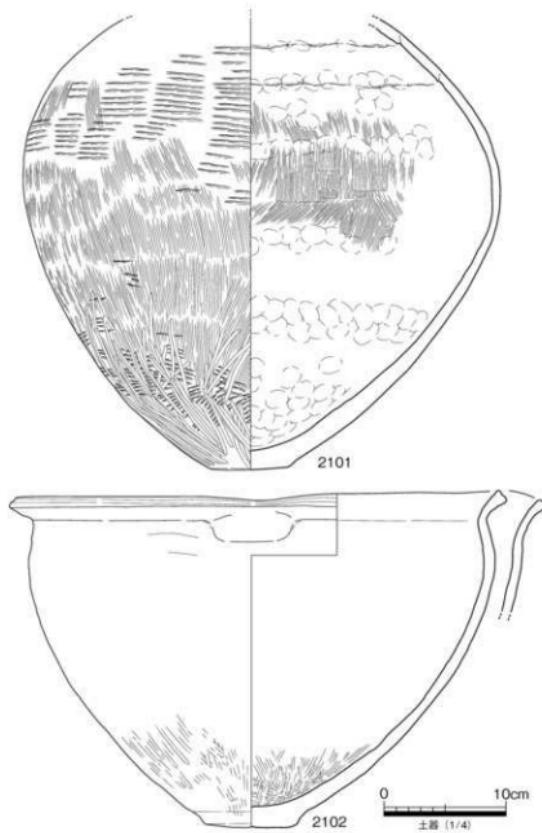
2100 は通常サイズの壺で球形に近い胴部から口縁部が強く屈曲して長めに外反するもので、底部は底縁後線がやや緩いが、厚めの平底を有す。外面調整はタタキ調整後に丁寧にハケ調整を行う形態で、口縁端部は面取りを丁寧に行う。胴部内面はハケ調整を基調として胴部下半を中心へラ削りを施し器壁を薄く仕上げている。終末期古段階の土器である。

以上の出土遺物から本土器棺墓は終末期古段階に属す遺構と判断した。

#### (4) ST4316a

4 区北で検出した土器棺墓である。後期後半古段階に埋没した溝 SD4336a と重複し後出する。墓壙は長軸 0.85 m、短軸 0.65 m の椭円形で主軸は北から 70 度西に偏った方向に設定される。底部側を垂直に掘り、斜め約 45 度に土器の棺材を安置し、土器の胴部下半の形状に沿って墓坑底が掘削される。棺材の土器の肩部付近で長さ 0.4 m の斜めの段をもつ。棺材の大きさに比べ墓坑の規模が大きい点で、旧練 II 報告の ST03 に類似する。

2101 は棺本体、2102 は棺蓋である。本体は胴部中ほどに最大径があり、底部へやや膨らみながら窄まる。底部は径がやや小さいが安定した平底である。2102 は大形鉢で壺とほぼ同じ器形である。口縁部の拡張は顕著でなく、凹線文を 1 条施す。器形、特に底部形態は後期後半古段階の特徴を示すことから、溝 SD4336a の埋没後あまり時間を経過することなく構築された土器棺墓と推察する。



第308図 墓ST4316a 出土遺物実測図